
スプラッシュ ～失禁（おもらし）からはじまる恋愛小説～

山下沙織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スプラッシュ ～失禁おもらしからはじまる恋愛小説～

【Nコード】

N8890T

【作者名】

山下沙織

【あらすじ】

誰もが見聞きし、ほぼ誰もが経験してきた「失禁おもらし」。

もし、好きな人の前でおもらしてしまったら、それはとても恥ずかしいことでしょうか？
いいえ必ずしも相手はそう思わないかもしれません。

相手はその出来事にきつと衝撃を受けると思います。あなたの恥ずかしさと引き換えに、相手はあなたのことを特別な存在と意識する

かもしれません。また、あなたがそこまでして思いを伝えてくれたことに感動し、あなたのことを深く心に刻むかもしれません。

そこに小さな「恋心」があるから、様々な思いを秘めた失禁^{おもろし}という出来事が、とても繊細に互いの心を動かし、恋のドラマが展開するかもしれないのです。

こうして、ふたりの絆が衝撃的に深まっていく・・・

そんな恋の風景をいくつかの小説にしてみました。

きつと誰もが経験してきた恥ずかしいけど不思議な気持ち・・・

だから誰の心にもそう「してみたい」気持ちがあるのかも・・・

懐かしい音楽を聴くようにリラックスして読んでくださいね。

スプラッシュについて

自分は大丈夫、と思っ^{おも}ていても、まだ誰もが経験するかもしれない「失禁」。

子どもの頃は毎日のように起こる身近な出来事でした。次第に大人になるにつれ、それはいつの間にか現実から遠く感じられるようになりましたが、たとえ大人であっても条件さえ整えばいつでも誰にでも起こりうることです。ひよっとしたら、今日してしまうかもしれません。

もし、大人になったあなたが、人前で激しく水流を滴らせながら、明らかにそれと分かるくらいのおもらしをしてしまったとしたら、それはあなたにとっても、それを見ていた人にとってもきつと衝撃的な大事件です。自分も周りも”信じられない”といった気持ちで、その状況に立ち尽くすことでしょう。

にもかかわらず、周囲からは「大丈夫、気にしないで」と声をかけられ、以後何事もなかったかのように収束されるかもしれません。でも、それは本人にとって非常に恥ずかしいことなので、そのことには触れないでいてあげようとみんなが気を遣うからに他ならず、それだけ周りのみんなに深い印象を与えたことの裏返しなのです。

ただしそれは決して悪い印象だけではないのかもしれないかもしれません・・・

今まで、このおもらしという出来事に焦点を当てた恋愛小説は、おそらくきつと無かったと思います。

おもしろいという出来事は、本人にとっては確かに気の毒な反面、見る人にとっては性的に「ドキッとする」、「エッチな気がする」感覚を呼び起こすことがあります。また、してしまった本人も生理的な失敗が「恥ずかしい」反面、生理的な解放感から「気持ちいい」感覚もあります。

これらのことのみに焦点を当てると、性的な満足感を追う「官能小説」のように描かれてしまいがちです。現におもしろいテーマにしたアダルトビデオは数多く出されています。

しかし、私はこのテーマを純粹に恋愛小説として描きたいと思いました。

なぜなら、恋人（あるいは未来の恋人）がおもしろしてしまうことによって、先ほどのような性的な感覚を覚えるほかに、その人の弱い側面を認識し、放っておけなくなったり、その人のことが急に気になりだしたり、あるいは恥ずかしい失敗をしたその人のことが逆に特別な存在に見え、自分が取り残された感覚すら感じることもあるかもしれません。

そして、この小説でおもしろしてしまう女の子（男の子）は、あたかもそういう相手の気持ちに応え、あるいは相手との間で自分の葛藤を解決するために、あるいは相手に心から近づくために、恥ずかしいと感じながらも、結果的には満たされた気持ちでおもしろします。

恋する人の存在があるからこそ、おもしろする人の気持ちも、単におしつこの我慢の限界を超えたので漏らすという単純な図式ではないのです。たとえば、恋の持つ不安、哀しさ、淋しさ、怖さなどは

我慢する気力を阻み、甘え、依存心、自意識、包みたい気持ちなどがあれば、恋人の前で子どものように漏らしてしまいたい衝動に駆られるかもしれません。

普通だったら、漏らしてしまうことへの恥ずかしさや、大人の自分、強い自分、社会性のある自分がその気持ちを否定します。しかし一方で、恋の展開により、幼い自分、弱い自分、可愛らしい自分への憧憬、郷愁といった潜在意識が芽生えたとすれば、いっそ漏らしてしまうことを肯定するかもしれません。

つまり、恋愛においては、身体は負けていないのに、心が負けてしまい、恋する人の前でももらしすることがあると思うのです。

そして、おもらしには、最初に述べた恥ずかしさや気持ちよさといった性的な感覚があります。また、濡らした服を脱がされる場面もあります。でもそれがあるからこそ、そのまわりの人にはドキッとした衝撃が走ります。その衝撃をきっかけに、先ほどのような繊細な気持ちや心の葛藤が次々と呼び覚まされ、恋が急展開するストーリーが生まれるのだと思います。

その服を濡らしたものは、普段はヴェールに包まれている、その人の人間としての営みを表したものです。それゆえに、おもらししたということ汚く捉えたり、あるいは笑いものにしたたり茶化したりせずに、その出来事にしっかりと向き合って成就したふたりの仲は、きつと固い絆で結ばれるに違いありません。このように描かれるおもらしの情景は、単におしっこの我慢の限界を超えてしてしまう「失禁」とは異なり、また当事者が嫌われたり蔑まれたり、あるいは深く傷ついたり悲しんだりすることがありません。

そこで、私はこのような情景を、あたかも水が弾けるような爽やかな意味をこめて「スプラッシュ」と名付けました。

「おもしろし」、それは人生で誰もが見聞きしたことであり、ほぼ誰もが経験してきたことでもあります。もしそこに小さな恋愛の情景があれば、カップルが百組いれば百またはそれ以上の素敵なストーリーがあると思っています。

小説「スプラッシュ」では、そうした誰もが経験してきた「恥ずかしいけど不思議な気持ち」によって、男女が素敵になれるストーリーを描きたいと思いました。

小説「スプラッシュ」ぜひお読みいただけるとうれしいです。

暖かな季節（総括）

穏やかな初夏の森を舞台に、突然彼女に訪れた「失禁」^{おもらし}が、ふたりの心の奥にある葛藤を解決して恋を展開させる、短編恋愛ファンタジー。

幼なじみの彼氏（涼）の見ている前で、不意に我慢できなくなり、いまにも失禁^{おもらし}してしまいそうになる沙織。

そのとき、沙織の幼少期の記憶が夢のように蘇り、涼が教室で「失敗」する場面に遭遇する。

沙織は、涼の一部始終を見て、幼少の沙織自身が抱いていた特別な気持ちを思い出す。それは解決しないままいつかうやむやになり、沙織が長い間忘れていた心の葛藤だった。

そこで沙織は、夢の中で涼を誘ってみる。彼と話すうち、涼がおもらした理由や、そのときの気持ち、そして沙織に恥ずかしい自分を見られたことへのわだかまりを知る。沙織は、自分自身の心の葛藤を涼に打ち明ける。

そして、夢から醒めた沙織は？

幼い頃の純粋な気持ちに帰ってみませんか？

暖かな季節（衝撃からはじまる恋）

「失禁^{おもらし}」というと、してしまったほうは恥ずかしさのあまり泣いたり、傷ついたり、とかく悲壮に満ちたイメージで描かれがちです。

でも、幼稚園や小学校で（あるいは中学校以上でも）、他のクラスメートがおもらししているのを見て、ドキツとしたことを覚えていませんか？

私の通っていた幼稚園や小学校は、規律が厳しかったせいか、よくおもらしする子がいました。中には前を平然と押さえて、漏らしてしまう子もいたりしました。

そんな中、とくに異性がおもらしする様子には、いつも私はドキツとさせられていました。

それ以来（しばらくの間）、私はその子のことが今まで以上に気になりだしたり、特別な気持ちを持ちたりしたことを覚えています。

ドキツとさせられたっていうことは、逆にその子から様々なセックスパピールを感じさせられたんだっていうことを、私は後から気づきました。そのとき、人生で初めてエロティシズムを経験したんだって思います。

確かに、おもらした子にしてみれば、それは大きな「事件」です。子供とはいえ、濡れた服を脱がされたり、違うパンツを穿かされたりというのは、それなりに恥ずかしそうでしたし、気の毒でした。また、おもらした年齢が高ければ高いほど、後々まで心の傷とし

て残ることもあるでしょう。

でも、その恥ずかしいことをしてしまったのと引き換えに、他の人をそれだけ「衝撃的に」魅了できることが、私には羨ましくも思えました。やろうと思ってもできないことなので、なおさらだったのかもしれない。

「おもらし（失禁）」という出来事は、そうやってあるとき「突然に」やってきて、本人やまわりの人の心の扉を「衝撃的に」開けて、様々な思いを撒き散らします。まさか本人もまわりも、今日自分がそんな「事件」の当事者になるなんて思ってもいなかったことでしょうか？

もし、そのとき、ふたりが恋愛関係にあったり、恋に至る途中だったとしたら・・・

キューピットの矢のように突然、互いに相手を特別な存在として意識させ、恋愛をキュツと深めることができたら・・・

そして、本当はとても恥ずかしい出来事でも、ふたりの間では一切悲しんだり、傷ついたりすることなく、暖かい思い出となったら・・・

それは、ひょっとしたら、すごく素敵なことかもしれない・・・

そんな恋のストーリーを考えて、小説にしてみました。

暖かな季節（我慢できる・・・はずなのに）

さっきまで照りつけていた日差しが雲に遮られたかと思うと、木立の間を風が吹き抜けだした。

” いつ言い出そうか・・・ ” ずっとそう思っていた沙織は、木々たちのざわめきに促される思いで、隣を歩く涼に向かって照れ笑いをしながら、でも目線は伏し目がちに、こうつぶやいた。

「おしっこ、したい・・・」

軽いテニスのあと、のどの渴きを癒すためたくさん飲んだミネラルウォーター。そして食後の冷たいアイスコーヒー。

そして、冷房の効いた帰りのバスに揺られるうち、汗はすっかり引き、代わりに急激な尿意が、沙織の膀胱を刺激しはじめていた。

コテージまでは坂を上って5分くらい。でも今の沙織にはこの上り坂が妙に長く思えた。

「もうすぐそこだよ」

沙織が笑いながらつぶやいたせいか、涼はそのことをあまり深刻に受け止めず、特にペースを変えることなく歩き続けた。

もっとも、歩きたびにずんずんと膀胱への刺激を感じている沙織にとって、これ以上速く歩くことはちょっと難しかった。

「着いたよ・・・あれ、ちょっと待ってね」

涼が鍵をあちこち探してなかなかドアを開けてくれないのを、沙織はもどかしく思っていた。自分が尿意に苦しんでいるのに、どうしてコテージに近づく前に、鍵をポケットから取り出してくれないんだろつと、沙織は不満気だった。

しかし、沙織自身、尿意はかなり高まっているものの、まだ十分我慢できると思っていた。

ドアを開けると、暖かい部屋の明るいフローリングの床にやわらかい陽射しが差し込み、きらきらと光っていた。

沙織と涼とは幼稚園のときの幼なじみで、大人になってから再会し、交際を始めてまだひと月ほどだった。いつも積極的なのは沙織のほうで、デートで涼にいろいろとちょっかいを出したり、自分が行きたい場所に誘ったりしていた。一方の涼は、沙織のことは好きだったが、いつも沙織に対して気後れする面があった。

”もうトイレに入れる・・・”

そう安心感に包まれた沙織は、さつき玄関でもたついた涼への仕返しとして、彼をちよつとだけ困らせようと思いついた。

沙織は、わざと尿意に苦しむふりをして、内股で靴を脱いで二、三歩進むと、少し前かがみの姿勢で立ち止まり、

「どうしよう、もう歩けない・・・」

と彼に嘘をついた。

”ほら、早くトイレに行つといでよ・・・”

そう優しく涼にたしなめられるだろうと、沙織は思っていた。

・・・が、沙織の芝居に気づかない涼は、沙織のただならぬ気配にびつくりして、思わず大きな声で立て続けに沙織に話しかけた。

「だ、大丈夫？ 我慢できないの？」

「だめ？ 漏れちゃいそう？」

そして涼は、沙織の前にしゃがんで、彼女の両腕をやさしく抱きかかえると、

「ごめん、沙織がそんなに我慢できないなんて知らなくて・・・」

と、真剣な顔をして沙織に謝りだした。

てつきり涼にたしなめられると思っていたのに、思いがけず涼から、まるで自分が本当におもらししてしまつかのようにな気で心配してくれる優しい言葉をかけられ、沙織の気持ちは動揺した。

そのとき・・・突然、まだ我慢できたはずなのに、なぜか、沙織の身体は勝手に我慢が利かなくなっていた。

「あつ・・・、ええつ・・・」

急に膀胱を含む下腹部全体が重たくなったかと思うと、何かが勝手に彼女の膀胱を押し広げていくのを感じ、沙織はパニックになってうつむいて小声で叫んだ。

「大丈夫？　だめ？　漏れちゃいそう？　ごめん、沙織のこと気づいてあげられなくて・・・、本当にごめんなさい・・・」

懸命に沙織をいたわり続ける涼の声と裏腹に、沙織は全身に寒気が走り、動けなくなった。

”どうしよう・・・ほんとうに漏れちゃう！”

沙織はどうしようもできずに、その場に立ったまま、ただうつむい

た。自分のデニムのショートパンツとそこから伸びる両脚をじっと見つめたまま・・・

暖かな季節（幼い記憶）

沙織は、いつしか記憶の中を旅していた。

沙織の目の前の風景が、木洩れ日の差し込むちよつと古びた木の床に変わっていった。

不思議なことに、沙織の尿意が少しずつ引いていった。

「だいじょうぶ？　がまんできないの？」

先生の声にサオリは、はっとした。先生の視線の先を追うように振り向くと、茶色のズボンを穿いた細い両脚を内股にくねらせて、おしっこを我慢しているリョウがいた。

彼は、振り向いたサオリのほうを切なそうな目で見ていた。だが、サオリの視線は思わず、リョウの股間から内股に集中した。

クラスみんなは帰りの歌を歌っていた。

”むかし、むかし、そのむかし・・・♪”

この歌が終われば教室を出て、おのおの決められた時間のバスで帰るまで自由に遊べるはずだった。

その若い女の先生は、リョウのもとに駆け寄り、彼の前にしゃがん

で何か話しかけている。

” おひさま、 にこにこ、 声かけた・・・♪ ”

歌がちょうど終わりかけた頃、再び先生の声がした。

「だめ？ もれちゃいそう？ ごめんね、先生さっき、気づいてあげればよかったのにね・・・、ごめんね」

サオリの胸が高鳴った。そしてその直後・・・

「リヨウくん、おしっこしちゃってる！」

まわりの友達の騒ぐ声にサオリが再び振り向くと、くねらせたリヨウの両脚のズボンの裾から、まるで水道の蛇口をひねったように、透明な「水」が勢いよく流れ出ていた。

クラスは騒然となったが、先生はすぐにみんなを静かにさせたあと、
「リヨウくんは、おしっこが我慢できなかったんです。でも誰にでもあることですから、けっしてからかったりしないこと」

「先生は、これからリヨウくんの着替えをしますから、みんなはすぐに教室から出て遊ぶこと」

と言った。

サオリは、クラスのみんなが教室の外に出ようとしても、リヨウのことが気になっていた。

そのとき先生がサオリに声をかけた。

「サオリちゃん、リヨウくんとお友達だったよね。悪いけど、保健の先生のところに行つて、着替えをもらつてきてくれる?」

サオリはうなずいて、教室をあとにした。本当はその場から目が離せない気持ちだった。

”このあとどうなっちゃうんだろう・・・”

サオリはできるだけ早く教室へ戻れるよう、急いで保健室へ向かった。

保健の先生が渡してくれたのは、数枚のタオル、ぞうきんと、リヨウが今日穿いて帰るための、毛糸でできた水色のブルマーのようなパンツだった。

サオリは急いで教室へ戻った。教室のドアは開けっ放しになっていて、サオリが教室へと近づいたとき、教室の奥の隅に先生とリヨウの姿が見えた。

先生はリヨウの前にしゃがんでいて、リヨウは立ったままこちらに背を向けていた。

サオリが近づいてくるのもお構いなしに、先生の手がリヨウのズボンを下げはじめていた。サオリの目に突然、彼の真白いパンツが映った。

そして近づくにつれ、彼のパンツはおしりの半分あたりから下が、おしっこでぐっしょり濡れているのが分かった。

「サオリちゃん、ありがとう。リヨウくんはいつものバスじゃ帰れないから、今日サオリちゃんは先に帰ってね」

リヨウの濡れたズボンを、慣れた手つきでひざから下まで一気に下ろし、それを片方ずつリヨウの足首から外しながら、先生はサオリに言った。

リヨウは泣きも笑いもせず、ただ立ったまま先生のなすがままにされていた。頭の回転がよく、サオリと楽しくしゃべりあっている、いつものリヨウの姿とは全く違っていた。

サオリは教室から出るため、ドアのほうへ数歩歩いたあと、

”見ちゃいけない・・・”

そう思いつつも、思いきってリヨウのほうを振り向いた。

そこには、丸くて切れ上がった、リヨウの可愛らしいおしりが露わになっていた。サオリの想像通り、すでにリヨウはパンツを下げられていた。

「リヨウくん、もうすぐ一年生になるのに、どうするの?」

下半身裸のまま、タオルで前のほうを丁寧に拭かれながら、リヨウは先生にやさしい口調でしかられていた。

一連の光景は、サオリの心に衝撃的であった。

窓からは、春先の優しい陽射しが差し込んでいて、教室の中は暖かだった。

みんなの前でおしっこを漏らして、教室にひとり残されて、先生や私の目の前で下半身を裸にされて、お世話をされているリヨウ・・・

サオリはそんなリヨウのことを気の毒に思うのと裏腹に、なぜだかとても羨ましく思った。

それからサオリは、隣にリヨウがいないまま、いつものバスで家路に着いた。

* * * * *
* * * * *

あのと、リヨウくんはどうしただろう?

脚とかおしりとか、先生にいろいろ拭かれたのかな?

どんな風にしかられたのかな?

それとも優しいことを言われたのかな？

水色の毛系のパンツは自分で穿いたのかな？

それとも先生に穿かせてもらったのかな？

あのパンツじゃ、誰が見てもおもらしたって分かるはず？

あのパンツのままバスに乗ると、みんな何て言うのかな？

* * * * *
* * * * *

サオリはしばらく気がかりだった。

”あるとき自分もその場に残り、先生と一緒にリヨウのお世話をし
てあげたかった”

”そして、リヨウくんと一緒に、バスに乗って帰ってあげればよか
った”

と思いはじめていた。

でもそれは、リヨウのためだけでなく、自分のためでもあった。

* * * * *
* * * * *

もし自分がおもらしたとしたら、どんなふうにされるのかな？

先生やりヨウくんの前で、パンツを脱がされるって、どんな気持ちなのかな？

自分がしちゃったら、どのくらい恥ずかしいのかな？

しかられるのはいやだけど、優しくされるのなら・・・？

先生に、あのパンツを穿かせてもらえるのなら・・・？

そして、あのパンツのままバスに乗ったら、どんな気持ちができるのかな？

* * * * *
* * * * *
* * * * *

そのことを知りたかった。

でも、それからすぐ、ふたりは卒園して離れ離れに・・・

そして十数年が経った。

”時が経ち、いつしかそんな思いも消えてしまったんだ・・・”

と、沙織は思い出していた。

暖かな季節（夢のなかの会話）

”あのと時のリヨウくんと話がしてみたい”

大人の姿になった沙織は再び教室へ戻り、姿を消してリヨウの様子を伺った。

「リヨウくん、こんど小学校に入ったら、おもしろしちやだめ。はい後ろ向いて」

リヨウは先生から言葉をかけられながら、向きを変え、おしりと太ももを丁寧に拭いてもらっていた。

リヨウの可愛い局所が、沙織の目に飛びこんだ。上半身はセーターを着ているのに下半身だけ丸出しのリヨウの姿は、前から見ても後ろから見ても、沙織にはとても素敵で可愛らしく見えた。

「うん、すっかりきれいになった。よかったね、リヨウくん」

先生は再びリヨウを前向きに立たせると、さつきサオリが持ってきた、水色の毛糸でできたパンツの裾を広げ、片足ずつ入れさせて、慣れた手つきでするとパンツを上げた。

それは、少しブルマーのような斜めのカットが入っている、暖かそうで、人に見られたら少し恥ずかしいパンツ……。でも、沙織には、それを穿かせてもらうことが羨ましかった。

最後にパンツの後ろをきゅっと持ち上げると、先生は両手でリヨウのおしりを包み込んだ。

「いい？ こんどは、おしっこしたくなったら、ちゃんと早めに先生に言ってね、分かった？」

リヨウは、ちよつとだけ微笑みながら、” うん ” と頷いた。

” そうなんだよね、早めに言わなくちゃいけないのに・・・ ”

沙織は、今の自分のピンチも、まさにそれが原因だったと反省した。調子に乗ってあれこれ飲み食いして、しかも薄着で冷房の利いたバスに乗って身体を冷やしてしまったことも・・・

沙織は、リヨウが教室から出てくるのを待って、彼を誘って教室の隣の小部屋に入った。

沙織が部屋の絨毯の上に座ると、リヨウの身体もいつの間にかすっかり大人になっていた。

沙織の目の前に脚をくずして座った彼は、毛糸のパンツを穿いたままで、ちよつと恥ずかしそうにしながら、まるでブルマー姿の女子のように綺麗な太腿を露わにしていた。

沙織が聞いた。

「リョウくん、おしっこ、漏らしちゃったんだね？」

「うん、我慢できると思ってたんだけど、歌になったら急にしたくなっちゃって・・・」

「どうして我慢できなかったの？」

「この歌が終わればトイレに行ける、って思っちゃったからかな？でもまだ我慢できると思ってたんだよ。ちよつと身体をくねらせただけ・・・。そしたら先生に見られちゃって・・・」

「大きな声で”だいじょうぶ？　がまんできないの？”って言われてた」

「それでびっくりしちゃったっていうのもあるんだけど、先生に”気づいてあげればよかったのね、ごめんね”って言われたときに、なんか身体が変になったんだよね」

「変・・・って、どんなふうに？」

沙織が興味深そうに訊いた。

「ほら、先生すごくやさしいでしょ？　そうやって言われたときに、なんか、僕・・・、先生に守ってもらえるような気がしたんだと思う。たぶん・・・」

「守ってもらいたくなつた・・・？」

「ひよつとしたら、そんな気持ちもあったかも。先生にこのままお世話されてみたいなんて気持ちも少し・・・。そしたら、急に我慢が利かなくなっちゃって・・・。」

” そうなの・・・そうだったんだ・・・ ” 沙織は心のなかでうなずいた。

「リョウくん、おもしろいしちゃうとき、切なそうな目をして私を見てた・・・。」

「沙織と目が合つて、急に恥ずかしさがこみ上げてきたんだ・・・。でももう止められなかった。それに、沙織ずるいよ。僕がパンツ脱がされているところ、しっかり見るんだもん。」

「ごめんね、でも、私・・・。」

「沙織に見られちゃったせいかな？ 大人になってから沙織と再会して、なんか、沙織には特別な気持ちを持ったんだ。ふつうの恋じゃない気持ち。先生と同じように、やっぱりすごく恥ずかしいところを見られているから・・・。」

沙織はずっと知りたかったことを、ドキドキしながらリョウに訊ねた。

「漏らしちゃって、脱がされちゃって・・・、先生や私に、見られてたときの気持ちって、どうだった？」

「すつごく恥ずかしかった……。女の人の前でパンツを濡らすつていうだけでも恥ずかしいのに、それを脱がされて、見られちゃうんだから……。沙織にも……。でもね……」

「何？」

リヨウは、沙織のわだかまりを解き明かしてあげるかのように、優しい口調で話し続けた。

「どうしようもなくなったそのときに、すつと力が抜けて、パンツの中に温かいものがあふれるように流れていつて……」

「おしっこを漏らすつていう、すごく恥ずかしいことをしちゃって、異性のなすがまま、パンツを脱がされて、下半身を見られながら、処理してもらった……。これって恥ずかしいはずなのに、あとから思い出すと、すごく気持ちよかったんだ……」

「先生はやさしくしかつてくれたし、沙織の持つてきてくれた新しいパンツを穿かせてもらったとき、僕のおしりを包んでくれた先生の手のひらが、すごく暖かった……」

「それに、教室には先生とふたり、そして沙織だけしかいなくて、なんだか陽だまりに包み込まれるような、やさしい気持ちを感じたんだ……」

「この水色の毛系のパンツを穿いたまま、それを他のみんなに見られながら帰りのバスに乗ったときは、ちょっと恥ずかしかつたけど……でも、特別な経験をした証しだから、自分のパンツに目をや

るとなんだか誇らしい気もしたんだ……。もしいつものように、サオリが隣にいれば、きつと見せてあげたかったし、いろいろ話してあげたかった……」

「でも、あのとときの僕を見て、沙織が僕のことをどう感じて、今もどう思っているのか、分からないから、ずっと沙織に甘えることもできなくて、いつも踏み込めなかったんだ。遠慮しちゃってたっていうか……。ひょっとして、僕のことを情けない男って、思っていない？」

「そんなことない……。私……。本当はドキドキしちゃってた……。本当は私もどこかで、リヨウ君の前で、おもらしできれば良かったんだよね。リヨウ君のためにも……。そして私のためにも……。でも、あれからすぐ卒園しちゃったし」

「したかったの……？」

沙織は、思い切って話した。

「リヨウ君のことを見て、頭から離れなかったんだから……。あれから先生にどうしてもらったのか、とか、どういう気持ちだったのかって、いろいろ考えて……」

「そうだったの……」

「リヨウくん、かわいそうなようで、でも、考えれば考えるほど、すごく素敵で……。すごく羨ましくって……」

「沙織・・・」

「私も、同じふうにされたかった・・・」

リヨウはすべて分かっていたかのように沙織を見つめ、そして彼女を包み込むように優しく言った。

「大丈夫、今の沙織ならできるよ。そしたら沙織のこと、僕がしっかり守ってあげる、だから・・・」

「うん・・・」

沙織は少し目を潤ませて、うなずいた。

沙織のまわりから、幼稚園の小部屋の情景が消えはじめ、元のコテージのフローリングの風景に戻りはじめた。

同時に、沙織の尿意も元どおりに、猛烈な勢いで高まりはじめた。

暖かな季節（エピローグ／恋のプロローグ）

沙織は、すっきりした爽やかな気持ちに包まれていた。出終わって
もなお、沙織のショートパンツの裾からは、まだ透明なしずくがい
くつも滴り落ち、沙織の綺麗な太腿を伝っていた。

「沙織？ おしっこ、漏らしちゃったんだね？」

「うん・・・、でもリョウくんと、同じことしただけだよ」

沙織は、はにかんだ笑顔で答えると、裸足のつま先で、彼女の足も
とにできた大きな水たまりを、まるでいたずらするように、つつい
てみせた。

「涼くんって、ずるいよね。知ってて、”だめ？ 漏れちゃいそう
？”とか、”沙織のこと気づいてあげられなくて、ごめんなさい”
なんて、声かけたんでしょ？」

「沙織の様子を見て、なぜかそういう言葉が出ちゃったんだ。どう
してだろうね？」

「いじわる、私知ってるんだから・・・」

「じゃあ、先生が拭いてあげる。こっちへ来て」

涼は沙織の手を引くと、暖かな日の差す窓際へ沙織を誘った。

沙織のつくった水たまりは、いつの間にか、真っ白いバスタオルで覆われていた。

涼は沙織の前にしゃがむと、まだ裾から少ししずくが滴り続ける沙織のショートパンツの上から、フェイスタオルを巻くようにして押さえつけると、まず丁寧に水気を取った。

そうして沙織に心の準備ができた頃、涼はゆっくりと沙織のショートパンツを脱がせはじめた。沙織の白いショーツが涼の目に鮮やかに飛び込んできた。

「沙織ちゃん、もう23才なのに、どうするの？」

沙織はよほどためらいなく失禁したのか、ショーツをおしりの上のほうまで、ぐっしりと濡らしていた。

「いい？ 沙織ちゃん、今度は、おしっこしたくなったら、ちゃんと早めに先生に言ってね、分かった？」

沙織の返事を合図に、ショーツが一気に脱がされるだろうことを知りながら、沙織はこっくりとうなずいた。

初夏の森の、陽だまりのなかに沙織はいた。

乾いたタオル越しに、濡れた部分を押さえつける彼の手はとても力強く、冷えたおしりを包んでくれた彼の手のひらは、とても暖かかった。

（「暖かな季節」終わり）

メッセージ（総括）

恥ずかしいはずの「おもらし」という出来事が、恋人同士の絆を衝撃的に深める、短編恋愛ファンタジー。

みさきは、幼友達のひかると大学で偶然再会し、ふたりは昔のようにすぐに親しくなる。

だが、みさきは昔、小学校の卒業間近にみんなの前で失敗してしまっていて、ひかるとはきちんとお別れできていなかった。また、失敗の負い目からひかるとの仲も深められずにいた。

ふたりの楽しい日々も束の間、みさきが海外留学することに。放課後の教室で、再び訪れる別れを知ったふたりは、しばらく言葉を失う。

時間だけが過ぎていく教室。

だが、みさきは、自分があるとき失敗したことで、ずっとひかるがみさきのことを案じ、覚えていてくれたことを知る。

これからも、ひかるに自分のことを忘れないでいてもらうため、そして、あたかもこれまでの自分の不安な気持ちをすべて押し流すかのように、みさきは・・・

メッセージ（過去の記憶）

私も含めて、過去にみんなの前でおもらしてしまった苦い思い出というものを、ある程度お持ちの方は多いのではないだろうか。しかし時が経てば、みんなの記憶からは薄れ、友達とも散り散りになっていき、やがて解決されていきます。

ただ、そのとき親しかったボーイフレンドと、時が経って再会したとしたら・・・

大人ですから、彼も過去の失敗はあえて口にしないでしよう。ただ、それゆえに彼女が、強い自分、大人の自分を演じようとすればするほど、その過去の失敗の思い出が足かせになり、彼との関係にうまく踏み込めないかもしれません。

それは常に心の片隅にある負い目のようなものです。しかし、相手の立場に立って考えるとそれは決して負の側面だけではないのかもしれないかもしれません。

もし、ある境遇に差し掛かったとき、それに気がつき、そして勇気を持ってふたりの関係を解決するメッセージを相手に届けることができたとしたら・・・

そんな物語をつくってみました。

メッセージ（再会）

「ひょっとして、柏木さん・・・みさきじゃない？」

「ひかるくん？ やっぱり！ 久しぶり」

「小学校のとき以来じゃない、同じ大学だったんだね」

小学校の同級生だったふたりは、こうして偶然再会し、親しくなっていた。

気の合うふたりは小学校のときも仲良しだった。まわりからも冷やかされていた。だが、昔も、そして現在も、恋人同士というほどの仲ではなく、いわば友達以上恋人未満の状態が続いていた。

みさきと再会したときから、ひかるはあることを思い出していた。

小学校のとき、3月の卒業が近づいたある日、ひかるはみさきと、ちよっとしたことでもけんかをし、互いに口を利かなくなっていた。そうして迎えた「卒業生を送る会」の日。会が終盤を迎えたとき、みさきの周囲が少しざわついたのだった。ひかるが振り向くと、みさきのまわりの女子がみさきに盛んに声をかけていた。みさきがおしっこを漏らしてしまったのだ。

6年生ということもあり、ざわめきはすぐに消え、周囲の友達は誰も冷やかすことなく至って冷静だった。先生に静かに促され、その陰に隠れるように目を伏せて保健室へと歩いていくみさきが、ジーンズのおしりから太腿にかけてぐっしりと濡らしてしまっていたのを、ひかるのいた遠くの席からも垣間見ることができた。

「送る会」が終わってみんなといっしょに退席する途中、ひかるは、みさきの椅子の下だけ透明な水たまりが広がっていて、体育館のキヤットウオークから差す日の光にきらきらと輝いているのが見えた。

まるでみさきは、連れて行かれる前に自分を言い残していたような・・・、ひかるはそんな気さえもした。

すぐに放課後となり、ひかるは渡り廊下から、みさきのいる保健室のほうを眺めた。今頃、先生に服を脱がされ、着替えさせられている様子を思い浮かべていた。普段は頭が良く快活なみさきが、今そんなふうになれることが、ひかるには想像つかなかった。きっと恥ずかしくていたたまれない彼女の気持ちを思いやると同時に、今彼女のそばにいてやれないことを、ひかるは悔やんでいた。思春期に入りかけたひかるが、生まれて初めて感じる切ない気持ちだった・

それから、みさきは学校へ来なくなり、数日して卒業式を迎えた。結局ふたりは言葉を交わすことなく、みさきは家族の転勤で遠くの街に引っ越していった。

ひかるが覚えていくくらいだから、みさきがそのことを覚えていないはずはなかった。だが、大学でみさきと親しくなっても、ひかるはみさきに対する思いやりから、そのことを口にしなかった。一方で、みさきはその失敗を負い目に感じていて、自分との仲を今一歩踏み込めないでいるのでは・・・とも、ひかるは感じていた。

メッセージ（テニスコートでの事件）

ふたりが大学で親しくはじめてから1年が過ぎた5月のこと。ひかるは、テニスサークルに所属するみさきを迎えに、テニスコートに赴いた。ひかるはベンチに座ると、みさきの脇で練習を見つめていた。

高いボールを受けようと背伸びするたび、ワンピースのテニスウェアの裾が持ち上がり、みさきの真っ白いアンダースコートが座っているひかるの目に飛び込んで、彼を釘付けにした。

みさきも、ひかるの視線を感じていた。いつもは堂々と振舞っていたのに、今日はなぜかスカートが翻るたび、下半身が心もとない感じがして、ボールを逸らしがちになっていた。

「おつかれさま、なんだか見とれちゃった」

練習が終わってベンチに腰掛けたみさきに、ひかるがミネラルウォーターのペットボトルを差し出した。

「ありがと、なんか今日は調子がわるいみたい……。ああ、のど渴いちゃった」

みさきは、まずそれを一口飲むと、ラケットをしまったためボトルをひざの間に挟んだ。だが、ふとしたはずみでそれがみさきのほうに倒れてしまった。

幅のある平らな木のベンチにあふれだしたペットボトルの水は、その上を容赦なく広がり、みさきのアンダースコートやショーツをあっという間に濡らしていった。

自分のおしりに広がった冷たい感覚は、みさきの記憶の糸をたぐるように彼女の心を激しくたたいた。

「あ・・・」

みさきは、声にならない声を上げた。

「みさき、大丈夫？」

ひかるが声をかけると、みさきは急に動揺して目を伏せた。そして顔を上げたとき、彼女は目につつすらと涙を浮かべていた。

「みさき・・・」

何が起こったのか分からず、ひかるが驚いて声をかけると、

「ごめんなさい・・・」

みさきはそう言い残して、更衣室へと走り去っていった。

メッセージ（思い出）

「ひかるくんなんて、だいつきらい!!」

「みさきなんて、どつかへ行っちゃえばいいんだ!!」

更衣室で、水に濡れたアンダースコートを脱ぎながら、みさきは、小学校のとき、最後にひかると言葉を交わしたときのことを思い出していた。

昔だったら、すぐに仲直りできたのに、ひかると同じく思春期の入り口に差し掛かったみさきを支配する複雑な感情が、それを邪魔させた。

”仲直りしたいのに、それが言えない。このままじゃひかるとずっと離ればなれ・・・”

みさきの中の解決できない不安やわだかまりは、日ごとにふくらみ彼女の心を掻き乱していった。そして「卒業生を送る会」の日、体調から尿意が近くなっていたみさきは、その不安やわだかまりを、それに重ねあわせてしまった。

”おしっこしたいのに、それが言えない。このままじゃ・・・”

ひかるとの仲直りのタイミングを失っていたのと同様に、先生にトイレに行かせてもらうべきタイミングも、みさきは失っていた。みさきの心をふたつの絶望感が襲いはじめ、問題を何とか解決しようというみさきの氣力を失わせていた。

”だめなの、わたし・・・、ひかるくん・・・”

そんな心の叫び声とともに、みさきは「送る会」が終わるのを待てずに失禁してしまった。それは、おしっこを我慢しきれなかったのと同じように、もうひかるとの仲直りもできないことを示唆していた。

薄暗く寒い春の日で、保健室は暖房が効いていた。みさきは泣きじやくりながら、保健の先生がやさしく彼女をなだめ、濡れたジーンズを脱がせていくのを感じていた。脱がされたあとの冷たい感じで、自分の白いショーツがおしりの半分くらいまでぐっしりと濡れて肌に張りついているのが分かった。

みさきは、解決できなかった自分の不安やわだかまりを、やけになつて踏み潰すように、膝下まで下げられたジーンズを、長い両脚をバタバタと足踏みするようにして外した。

だが、そうすることで、なおのこと、ショーツの冷たい感触だけが太腿やおしりにまとわりつき、彼女は悲しくなった。

ただ、ひとつだけ、みさきは感じていたことがあった。さつきまでこの中に広がっていたあたたかい感触が、ひよっとしたら自分のまわりに、そしてひかるの心に、何かを残したのではないか・・・？ただ、それが何だったのかは、みさきには分からなかった。

テニスサークルの更衣室で、濡れたショーツを脱ごうとしていたみさきの心を、そうした思い出が、走馬灯のように駆け巡っていた。

ショーツに手をかけたまま、ぼんやりと佇むみさきを呼び覚ましたのは、海外からの電話の着信音だった。

メッセージ（みさきの思い）

テニスコートでの出来事があってから、ひかるはみさきがいつものように元気がなく、悩んでいるのに気がついた。時折、やさしく声をかけ、それとなく励ますと、みさきはうれしそうな笑顔を見せた。そんな状態が半月ほど続いたある日、ひかるはみさきから、放課後の教室で待つように伝えられた。きっとテニスの練習のあとだろうと思ったひかるは、木洩れ日の差す誰もいない教室で、じっとみさきを待った。

みさきは、その日テニスサークルを休んでいた。更衣室で服を着替え、髪をとかし、化粧を直した。ひかるにいちばん綺麗な、そして印象に残る自分を見せたいと思っていた。

しばらくのち、テニス用の大きなバッグとともに教室に現れたみさきの、顔の色艶と装いの美しさに、ひかるは思わず目を奪われた。

「留学？」

みさきの言葉に、ひかるがびっくりして訊ねた。

「ボストンにいるパパが、こっちへ来ないかって。英語の勉強にもなるし」

「いつまで？」

「行ったら、たぶん2年は帰れないと思う」

「そうなんだ・・・でも、突然なんだね・・・」

ひかるは言葉を失った。

静まり返った教室の中で、時間だけが過ぎていった。みさきは言葉の合間に、まるで沈黙を避けるように、大きな水筒のスポーツドリ
ンクをストローで飲んだ。

「みさきとは、いつも急に、別れることになっちゃうんだね。あの
ときみたいに・・・」

ひかるがつぶやいた。

いつのまにか水筒の中のを全部飲みきってしまったみさきは、
思い切ったように、話し出した。

「私、卒業生を送る会するとき・・・ね・・・」

ふたたびためらうみさきの言葉をさえぎるように、ひかるが言った。

「覚えてるよ。いつも優等生で、そんな失敗しそうなみさきだったから、びっくりした」

「恥ずかしい・・・」

「そんなことないよ。誰にでもあることだよ」

「自分でも、どうしちゃったのかな・・・って思ってたの。先生に言ってトイレに行かせてもらおうと思ったんだけど、タイミング逃しちゃった。したらなんだか心にぽっかり穴が空いちゃって・・・」

「穴？」

「みんなと別れて自分だけ引越しちゃうのが淋しかったっていうのもあるんだけど、あのとき、ひかるくとけんかしちゃってたでしょ。謝りたくても謝ることもできない自分がいて・・・、したら自分の気持ちも伝えられないまま、私行っちゃうんだあつて」

「あれから、顔を合わせることもなく、みさき、行っちゃったもんね・・・。そうだったんだ。でも、そのとき伝えなかった気持ちって・・・？」

「・・・」

ふたたび長い沈黙が続いた。目を伏せたみさきが時折、脚を閉じたり、腰をおもむろにひねらせはじめていた。

みさきの様子が気になり、ひかるが訊いた。

「この間、みさき、水をこぼしたとき、泣いちゃったでしょ？ あれって・・・どうして？」

みさきは、少しためらったあと、話しはじめた。

「急に・・・思い出しちゃったの。ひかるくんの前でパンツを濡らしちゃったことが、急に恥ずかしくなっちゃって・・・そのときはどうしようもなくて・・・ごめんね」

「そうだったんだ・・・」

みさきは続けた。

「でも思い出すうちに、あのときの気持ち・・・なんだかよみがえってきたの・・・」

「あのときの・・・気持ち？」

「・・・」

ふたたび沈黙が訪れた。

みさきの様子が変わった。ひかるに悟られないよう、身体はじつと動かないでいるものの、小刻みに肩が震えているように感じられた。みさきの心の中に、きつとわだかまりのようなものがある。みさきを傷つけないように、それを出してあげるには・・・

そう思ったひかるは、思い切って切り出した。

「みさきがあのとき・・・、送る会するとき、おしっこを漏らしてくれたから、僕、ずっとみさきのこと覚えてた」

ひかるの言葉に、みさきの目が輝きはじめた。その表情に促されるように、ひかるは続けた。

「みさきのこと、覚えてたから、だからこうしてまた逢えたんだと思う」

「ひかるくん・・・」

「僕、あのあとみさきのことが気になってたんだ。みさきの席に水が広がってるのを見て、みさきが何か言い残していったような、そんな気がしたんだ。みさきは、僕にきつと伝えたいことがあったんじゃないかって・・・。無理だと分かっていたけど、あのとき保健室に行つて、みさきの世話をしたいって、そこまで思ってたんだ・・・」

みさきは言った。

「あるとき・・・、保健室で先生にジーンパンを脱がされてたとき、これが先生じゃなくてひかるくんだったらなあって思ってた。ここにいるのがひかるくんだったら、きつと謝りたいことも、心のわだかまりも、今だったらぜんぶ素直に話して、行けるのにつて」

みさきの顔が上気した。そして手が震え出していた。

「ひかるくんのこと、好きだったの。今も好き。私のこと絶対、忘れないでくれる？」

叫ぶようなみさきの声に、ひかるは黙ってうなずいた。

「私・・・、怖い」

みさきの身体が硬直した。ひかるはみさきの手をしっかりと握った。

みさきはうれしそうにはにかんで、目を伏せた・・・

しばらくのち、みさきの手が震えが収まった。それと同時にみさきの太腿の間に、透明な水がためらいなくあふれていった。

それは椅子から床に伝い、その水の音が静かな教室にやさしく、そして長く響き渡っていた。

メッセージ（エピローグ／恋のプロローグ）

ひかるに手を握られながら、みさきは、いままでの不安だった気持ちやわだかまりなどを、ひかるの前ですべて流し出していた。

みさきの椅子の下に、みるみる広がっていく透明な水たまりに、ひかるはこれまでずっと苦しかったみさきの気持ちを思い、それらをすべて受け止めたいと感じていた。

そして、ひかるは小学校のときに見た情景を重ねあわせた。みさきのことが、抱きしめたいほどか弱く、そして可愛らしかった。やっとなのときのみさきに出会えた気がした。

長く続いた水の音がようやく収まると、ひかるは黙ってみさきの両肩を抱え、ゆっくりと立ち上がらせた。

「あつ・・・」

動いてみて、自分のおしりから太腿までぐっしりと濡れていることにあらためて気づいたみさきは、少し内股にぎこちなく立った。そして、横顔のままひかると目をあわせると、急に恥ずかしい気持ちがちがこみ上げてきた。

でも、この濡れた感じは、あのとき体育館の椅子で感じたものと一緒にあった。みさきの中で、時間が遡っていった。恥ずかしさも、美しい思い出の１ページのように感じられた。

みさきは、まるで少女に戻ったように、

「また、おしっこ、漏らしちゃった」

と、無邪気につぶやいてみせた。

「みさきは心に穴が空いていたんだね。ふさがった？」

みさきのジーンズのホックをはずしながらひかるが声をかけると、みさきはこっくりとうなずいた。ひかるはゆっくりとみさきのジーンズを膝下まで下げた。

みさきは、今までの不安やわだかまりが消え去ったうれしさのあまり、ひかるの前で無邪気に長い両脚をばたばたと足踏みするようにして、濡れたジーンズを足から外した。

みさきの白いショーツは、おしりの半分くらいまでぐっしりと濡れて肌にはりつき、窓から差し込む光に肌が透けていた。

明るい春色のフリルのカットソーにストールを巻いたファッショナブルな上半身とは対照的なみさきのショーツ姿に、ひかるはみさきを気につけ、ただ保健室のほうを見遣っていたあのときの気持ちを思い出していた。

「みさき……すごく、綺麗……」

ひかるは、魅力的なみさきの姿を、忘れないようにしっかりと目に焼き付けようとしていた。

ぼんやりと佇む彼に、みさきが声をかけた。

「私のこと、忘れないって、約束だよ」

「絶対にみさきのこと忘れないさ・・・時々逢いに行ったとき、また心に穴が空いたら、こうしてふさいであげる。約束だよ」

「うん・・・」

高揚した彼女の声とともに、ひかるはみさきのショーツを脱がせた。はじめて見るみさきの裸は、日の光に照らされてきらきらと輝いていた。

みさきは、恥ずかしさのあまり、両手で顔を覆った。

でも心の中で思った。あのときと同じ格好。あのときと同じ濡れた感じ。あのときと同じ恥ずかしさ・・・

でもあの保健室にはひかるがいなかった。

でも今、ひかるは自分の目の前にいる。そしてこれからも自分を守

ってくれる・・・

だから、みさきは幸せだった。

（「メッセージ」終わり）

時間旅行（総括）

互いを傷つけずに恋人の絆を確かなものにするため、ベッドで失禁する二人の、繊細な心の動きを描写する、短編恋愛ファンタジー。

就職内定者の懇親会にリクルートスーツで臨んだ彩夏。だが、緊張が続いたあまり、迎えに行った彼氏の翔の前で、激しく嘔吐してしまう。

年下の翔は衝撃を受け、そんな彩夏の身体を気遣う。これから社会に出る彩夏に訪れる試練を思いながらも、それに対して何もできない、学生である自分の無力さと、その生活が彩夏の心を変えてしまいかもしれない不安から、彩夏に甘える。

不安は彩夏も同じだった。今後待ち受けている厳しい日々はもちろん不安だった。が、そんな日々にもまれていくうち、自分の心が変わり、翔を悲しませることが何より不安だった。

時間が過ぎていくベッドの上。

今だけは時を止めて、不安など無かった頃の気持ちに戻って、互いの愛を確かめあいたい二人の行動と、その思いとは・・・

時間旅行（不安からの解放）

気になる異性が突然、自分の前で吐いてしまったら・・・

それは、おもしろいときと同じように、お互いにとって衝撃的ではないでしょうか。

異性に背中をさすられて吐く情景は、当事者の間に特別な気持ちを起こさせると思います。吐くほうは、恥ずかしい自分をさらけ出しながら気持ちが解放されていきます。また世話する側は、その人の弱い側面を発見し、守ってあげたい衝動に駆られます。このことはおもしろいによってもたらされる衝撃と似ています。

そして吐いてしまった人はそれをきっかけに、自分の弱い側面を見せることに抵抗がなくなり、相手への依存心が生まれ、愛情に包まれたくなります。また、介抱した人もその人の身体を案じ、放っておけない気持ちになります。

このとき外界からの強いストレスがあると、ふたりは内向きの感情に包まれ、不安な気持ちがこみあげてきます。それは時として強い尿意を感じさせ、それを出してしまうことで不安から逃れたい気持ちを醸し出します。そして、もし失禁してしまったときは、不安など無かった幼い頃の陽だまりのような気持ちに包まれるでしょう。

いずれは外界に順応し立ち向かっていくのですが、今だけは互いに甘え、不安から解放されたい、そしてふたりで幼い子どもの頃の気持ちに戻って、愛を確かめたいと思うふたりの、繊細な心の動き

を表現してみました。

時間旅行（私、吐くんだ、きつと・・・）

黒いリクルートスーツに身を固めた彩夏は、翔の目にまるで別人と
思えるほどまぶしかった。

3月のある昼下がり、大学が春休みの翔は、街まで彩夏を迎えにい
き、車に乗せた。

4月から入社する内定者の懇親会は、食事会を挟んで無事終わった
が、彩夏には緊張の連続だった。郊外へと走らせる車の中で、翔は
彩夏の様子が少しおかしいことに気がついた。

彩夏は、緊張のままやや無理して食べたランチコースの料理が消化
されないまま、おなかに残っていた。緊張が解かれた安堵感と、車
の揺れのせいで、今まで抑えていたものがあふれ出してきそうな、
心地よい吐き気を感じていた。柑橘系のジュースをたくさんいただ
いたのも、いけなかった。

山沿いの道は少し曲がりくねってきて、アップダウンも多くなつて
きた。森の中は、木漏れ日がきらきらといくつもの光が明滅するよ
うに見えて、とても綺麗だった。でも、彩夏の身体にはちよつと刺
激だったかもしれない。

「うううえ・・・」

不意にそんな声を出してしまったことにびっくりしたのは彩夏自身だった。だが、翔はこれから起こることを予感していた。

少し広い駐車帯に差し掛かると、翔が静かに車を止めた。そして助手席の扉を開け、彩夏を車から降ろした。目の前の常緑の灌木は、ちょうど彩夏たちの目の高さまで、葉が生い茂っていて、上がったばかりの雨粒が日の光に照らされて輝いていた。

翔は、彩夏の肩に手を添え、数歩進んで、たわわに生い茂る木立の前で立ち止まると、おもむろに彩夏の背中を強くさすりはじめた。

「彩夏、緊張したんだね・・・」

翔にそう言われて背中をさすられた彩夏は、おなかのあたりを覆っていた重たいものがすうっと軽くなっていくのを感じた。

もし何かあっても、目の前に生い茂る木立の葉が、自分の中のものを受け止めてくれる・・・そう安心したせいかもしれない。

彩夏は、急にいままでの気持ち悪さが引いてすごく楽な気持ちになつていった。その一方、翔の手が自分の背中を上下するのにつれて、何かを出してしまいそうな絶頂感にも似た感覚が急激に高まっていた。

え・・・ちょっと、待って

あ、私、吐くんだ、きつと・・・

「もうだいじょうぶ、だから・・・」

翔のやさしい言葉に、彩夏は、

「じぼっ・・・」

自分の意思と関係なく、10メートル先にも聞こえそうな大きな喉の音をさせてしまった。慌てて平静を取り繕おうとしたものの、彩夏は自分の胃が勝手に収縮していくのを感じた。

黒いジャケットとスカート、そして白い襟付きのブラウスと、清楚に身を包み、さっきまで優雅に振舞っていたはずの自分が、翔の前でその喉もとから下あごにかけて、みるみるとしどけなく開かせていくのを、彩夏はどうすることもできなかった。そして、

シャアアア・・・

と、森じゅうに静かな音を響かせて、吐いた。

私、吐いちゃった・・・

彩夏は思った。すごく久しぶりに吐いたこと、寸前まで吐くと思っ
ていなくて、ほとんど心の準備もなく吐いてしまったことが、自分
でも信じられなかった。

しかも、それが翔の前だったことが、彩夏は恥ずかしかった。でも、
翔に背中をさすってもらい、翔に見守られながら、胃の中のを
出していることが、ものすごく気持ちよかった。

だから、吐いたのはきつと翔のやさしさのせいだと彩夏は思った。
そして、今はそれに甘えてしまおうと思った。

彩夏の嘔吐を予感していたとはいえ、それを目の当たりにして翔は
驚いていた。彼はただひたすら、彼女の背中をさすり続けていた。

その一方で、緊張から解き放たれ、木立に守られながら吐いている
彩夏の姿が、翔には気持ちよさそうにすら見えた。

彩夏の口からあふれ出た、オレンジがかった太くて透明な液体は、
目の前の木立の多くの葉を上から下まで無数の粒々で汚しながらも、
それらによってしっかりと受け止められたことで、彼女の衣服をほ
とんど汚すことはなかった。

「ごめん・・・吐いちゃった」

吐き終わった彩夏は、恥ずかしそうに翔に軽く目配せをして、少しだけ微笑んだ。驚いて心細くなりかけていた翔には、そんな彼女がとても艶っぽく見えた。

ふたりが、もと来た道を下り、駐車帯のアスファルトに出ようとしたとき、

「ふうむう・・・」

と力の抜けた悲鳴のような声とともに、彩夏はとっさに顔を横にそむけた。身体は山側に戻りかけようとしたが、それが精一杯だった。彩夏はふたたびこみ上げてくるのが間に合わず、路側帯の上で立ち止まった。それは全身の力が抜けていくような、気持ちいいこみ上げだった。

私、また吐く・・・

自分でも二度も吐くと思っていたいなかった彩夏は、おなかのあたりに手をやりながら、立ったまま顔だけをちよつと下に向けるのがやつとだった。

翔に甘えたせいもあるかもしれない。一度吐いた自分の身体は、もう吐くことに慣れてしまっていた。

さつきより薄くなったオレンジの液体は彩夏の口からだけでなく鼻からも同時に溢れて、アスファルトの上に音を立てて落ち、彼女のストッキングやパンプスにも激しく飛び散っていた。

翔はふたたび彩夏の背中をさすった。

「彩夏、よほど緊張してたんだね・・・大変だったね」

誰よりも大切な彩夏が激しく嘔吐する一部始終を見ていた翔は、一層心細くなっていった。彼は、吐き終わった彩夏をその場に座らせると、持っていたハンカチを彼女にそつと渡した。

彩夏はスーツ姿に似つかわしくないあどけない笑顔でうなずくと、それを使って口や鼻のまわりについた吐瀉物を拭った。吐いたことは恥ずかしかったが、すっかり胃の中のものを出した彩夏はすつきりした気持ちに包まれていた。そして翔にやさしくしてもらえたことがうれしかった。

吐き気がおさまるまで少し休んだほうがいいと判断したふたりは風に吹かれながら、その場でしばらく休み、スポーツドリンクで少しずつ喉を潤した。

時間旅行（ずっと時が止まってくれば・・・）

あんなに吐いてしまった彩夏のことが、翔には衝撃的だった。彼女の吐いた量に、いまの自分たちと社会人生活とのギャップの大きさと、それに対する彼女の心の叫びを見た気がした。

コテージへ向かう車の中で、それでも平静を取り繕っている彩夏のスーツ姿が、翔にはまぶしかった。年下の自分はまるで取り残されていきそうな、そんな不安な気持ちが一気によぎった。そして、彩夏の身体を誰よりも気遣っていたものの、これから違う世界に行く彼女に訪れる厳しい試練に対して何もしてあげられない、学生である自分の無力を感じずにはいられなかった。そして、その厳しい生活は、彩夏の心を変えてしまいかもしれない、そんな気さえしていた。

彩夏の身体を気遣い、ふたり服のままベッドに倒れこむと、翔は彩夏に甘え、彼女の胸に顔をうずめた。彩夏のブラウスからは、ほのかに彼女の胃液の匂いがした。

彩夏が吐いたあと、外で休んでいたふたりの身体は思った以上に冷えきっていた。そのとき摂った水分のため、翔は尿意を感じていたが、翔はその場を離れたくなかった。今離れてしまうと、自分の気持ちに彩夏に受け止められず、ずっと彼女と離ればなれになってしまうような気がした。

彩夏は、次第に翔が身をくねらせるのに気づき、彼に声をかけた。

「翔くん、具合悪いの？」

「・・・」

「言ってみて・・・」

翔はためらった後、彩夏の胸の中で目を閉じて、こうつぶやいた。

「おしっこ、したくて・・・でも今は離れずに、彩夏とずっとこうしていたいんだ」

彩夏も、不安だった。就活に苦労し、ようやく得た内定だった。今後待ち受けている厳しい社会人としての日々はもちろん不安だったが、そんな日々にもまれていくうち、自分の心が変わっていき、翔を悲しませることのほうがかつと不安だった。彩夏も翔と同様、昼の食事とさっきの水分のせいでかなり尿意が高まっていた。彩夏が答えた。

「私も・・・おしっこしたいけど、でも、翔くんと同じでいたい・・・」

「うん、ずっと同じでいよう・・・」

翔は言った。だが、そのうち翔が、身をよじらせて、起き上がりそんな気配を感じると、彩夏は不安になって、翔を抱き寄せた。

ずっと時間が止まっていってくれればいいのに・・・

彩夏は、翔にそう言われているように感じた。そして時間だけが経過していった。

時間旅行（おもしろ、してもいい・・・）

彩夏は、自分の胸に顔をうずめながら、翔が激しい尿意のため時おり小刻みに震えているのが分かった。自分もトイレに行きたかったが、翔の気持ちを思うと、いま彼にトイレに行くように促すことはできなかった。

「翔くん・・・」

彩夏はどうすることもできず、ただ翔の名前をつぶやいた。

すると彩夏の胸に顔をうずめながら、翔が言った。

「彩夏・・・社会に出て、ほんとに大丈夫？」

彩夏がそつと答えた。

「大丈夫。ちゃんとやっていくから」

「あんなに吐いちゃったのに・・・？ 僕、すごく心配なんだ」

「うん、今日はちょっとね・・・でも翔くんに背中さすってもらって、気持ちよかった」

「ごめんね、僕、それくらいしか、してあげられなくて・・・」

「翔くん・・・」

「彩夏の気持ち、変わっていくんじゃないかって・・・」

「そんなことない。大丈夫」

「ほんと？」

「私、ずっと翔のこと守る。離さないから」

横向きに寝ていた翔の両手が、彼女のわき腹の辺りにしがみついた。彩夏はさっき自分がしてもらったように、やさしく翔の背中をさすった。

初めて自分への彩夏の気持ちを聞いて、翔は心の安らぎを得ることができた。それと同時に、

彩夏が自分のことを守ってくれる

自分は彩夏に甘えることができる

そういう気持ちで心がよぎった翔は、打ち寄せる尿意の波を今まで我慢できたはずなのに、急に自分の身体が勝手に我慢できなくなっていくのを感じた。

自分の意思に関係なく、膀胱が自然に押し広げられていくのを感じた翔は、その場から身体を動かすことができないように思えた。

「あ．．．やか．．．」

このままじゃ漏らしてしまう．．．大人になって初めて覚える感覚に、翔は動揺した。まさか本当におしっこを漏らすことになるとは思っていなかったからだ。

「翔．．．どうしたの？」

翔のただならぬ様子に、彩夏が問いかけた。

彩夏は、翔がこのままおもらしてしまうことを直感した。

そして、おもらしてもいいと思った。

「ごめん、翔くん、私がもっと早く言ってあげればよかったね。ごめんなさい、翔くん」

彩夏は謝りながら、翔の背中をさすり続けた。まるでこれから吐いてしまう子を見守るように、胸が少し高鳴っている自分に気づいた。

翔にとってほんの十秒ほどの出来事だった。彩夏の手を払いのける

ように、本気でベッドを飛び出しトイレに駆け込めば間に合ったかもしれない。でも、翔はその力を振り絞るよりも、彼女に甘えてみることを選んだ。

身体が負けないうちに、心が負けてしまった。

不安でいっぱいだった翔の気持ちは、解放感とともに、自分の下腹部と、ベッドの上の腰、脇腹にかけての火照るような熱い感触に変わった。

それは遠い昔に感じたことのある、懐かしい感覚だった。母親の胸に甘え、不安を吐露し、慰められ、失禁する・・・そうして陽だまりのように守られれば、どんな不安も消え去った頃のこと。実際にそういう体験をした記憶はないが、なんとなく身体が覚えている感じがした。

まどろんでいく翔の中で、時があの際に戻ろうとしていた。

時間旅行（時間旅行）

彩夏は、翔の震えが止まり、自分の太腿のあたりが熱くなったことで、翔が失敗したことを悟った。それが彼の強い不安のためだということも分かっていた。

彩夏は布団を剥いだり、翔の濡れた服やシーツを確認しようとはしなかった。そのままにしておく限り、翔は恥ずかしくないし、翔を不安から解き放てると思ったからだった。

そして彩夏も、翔に寄り添いながら、まどろんでいった。

時間の先に、翔がいた。

翔のジーンズは下腹部やおしりが濡れていた。それを見て彩夏が翔に問いかけた。

「翔くん、おしっこ、漏らしちゃったのね？」

「うん」

不安が消え去った子のように、翔は笑って爽やかに答えた。

彩夏は激しい尿意を感じて、震えていた。翔の不安を解いてあげよ

うとずっと見守ってきたが、その翔が失敗してしまった今、氣力が尿意を押さえ込むことができなくなっていた。

その尿意がさらに、彩夏の心を不安にした。まどろみの中で、彩夏はさっき言えなかったことを口にした。

「私・・・ほんとにちゃんとやっていけるかな？」

「彩夏なら、きっと大丈夫だよ、がんばり屋だから」

ベッドの上で不安をすっかり流しだした翔は、さっきまでとは違う力強い声で彩夏を励ました。だが、それが逆に今の彩夏の不安を高めた。

「ほんととはね、社会に出て自分の気持ち、変わらないかっていえば、自信がないの。自分の気持ちが変わってしまって、翔くんを傷つけることが怖い・・・」

哀しそうにそうつぶやく彩夏に、翔は言った。

「きっと、彩夏は社会で羽ばたくから、彩夏の気持ちは変わっていくかもしれないって、思う」

「翔・・・」

「でも、時はいつでも戻すことはできるさ」

「どうするの？」

「僕のほうに来て・・・」

翔は、不安でいっぱい彩夏の身体を抱き寄せると、

「彩夏、緊張しないで」

と言って、彩夏の背中をさすった。

彩夏は、さっき吐いたときのように、身体に暖かさを感じた。きつとすぐ楽になる・・・翔がそう言っているように思えた。

まどろみのベッドの上で、彩夏はまるで吐くものがこみ上げてくるように、膀胱の筋肉が自然に押し広げられていくのを感じた。彩夏の心に安心感とともに、翔に甘える気持ちが芽生え、彼女はただ自分の身体が気持ちいいように、自分の身体が望むように、その状態に身を任せた。

「もし心が変わりそうになったら・・・今日のこの時のことを思い出そうよ。きっと僕たちの心に焼きついているから」

「うん・・・」

翔との絆を確かなものにしようとする、この瞬間が、彩夏にはかけがえのないものに感じられた。彩夏はもう、少しも恥ずかしくなかった。翔がいつそう彩夏の背中をさすった。

「翔くん、わたし・・・また吐く・・・」

それからすぐ、彩夏は解き放たれた。不安だった気持ちが温かい水となって彩夏のスカートにあふれ、ベッドの上のふたりを温かく包んだ。それは灯火のように熱くなり、悩みなどなかった幼い頃への時間旅行に、ふたりを運んでいった。

ふたりはしばらくの間、幸せな眠りについた。

窓からは雨上がりの眩しい夕日が差し込み、ふたりの顔を照らし出した。

眠りから覚めたふたりは、そっと掛け布団を剥ぎ、ベッドから起き上がった。布団の熱で温かった下腹部や腰のまわりが、急に冷たくなった。

彩夏と翔はベッドの脇で寄り添いながら、シーツの上の大きな世界地図を見て、顔を見合わせた。さっきまでの楽しい時間旅行が醒めてしまったことが残念だった。

「結局、時は止められないんだね・・・」

「でも小さい頃に戻ることはできたね」

「悩みなど、なかった頃に・・・」

「また、戻ってみたいね・・・」

翔と彩夏のどちらが作ったのか分からない世界地図なので、ふたりとも恥ずかしくなかった。それよりも、下腹部の今の冷たさ、そしてさっきまでの温かさを、互いに共有していられたことが、うれしかった。

「彩夏が仕事に疲れたら、また・・・戻ってみようよ。でも・・・今度は防水シート敷いておこうね」

ふたりは顔を見合わせて微笑んだ。

時間旅行（エピソード）恋のプロローグ

5月になったある週末、彩夏が1ヶ月の社員研修を終えて、翔のもとに戻ってきた。

「彩夏、ここに干しておくね」

彩夏のデニムとショーツ、靴下やタオルなどを洗濯機から取り出した翔は、それらを手かごに入れて窓際に持って行きながら、下半身ショーツ姿の彩夏に言った。

「でも、ほんとびっくりした……。彩夏、いきなり漏らしちゃうから……。」

入り口近くのフローリングには、彩夏の水たまりを隠すように白い大きなバスタオルが敷かれていた。

「だって、ずっと翔くんに会えない間、我慢してたんだもん……。」

翔は彩夏の洗濯物を丁寧に一つひとつハンガーに掛けては、窓際の高いところにあるカーテンレールに吊るすようにして干していた。細くて小柄な翔の身体が、ハンガーを吊るすたびに上半身を反らし

ておしりをちよつとつき出しながら背伸びする様子が、彩夏には可愛らしかった。

1ヶ月半ぶりに会うときは、一刻も早く翔を安心させたい・・・彩夏はそう思っていた。社会人としての厳しい訓練を経ても、あのときの翔との「時間旅行」の記憶が、彩夏の気持ちを変えさせることはなかった。いつでもあの頃に戻れる・・・そう思うことが心のバランスとなり、厳しい研修期間も乗り切ることができた。

そのことを伝えたかった。でも、あらかじめ考えてきたとしても言葉では伝える自信がなかった。だから今日は翔に会う前から水分を摂り、我慢してきた。きつとそれが背中を押して、伝えるべきタイミングを教えてくれるだろうと思った。

「でも、ベッドまで我慢できなくて、ごめんね。それに・・・普通に漏らしちゃうのって、こんなに恥ずかしいんだね・・・」

翔の手かごには、洗ったばかりの彩夏の純白のショーツがあった。

さっき、部屋に入った途端、立ったまま失禁してしまった彩夏。その両脚に張りついたデニムを少しずつ脱がせたときのショーツには、まだおしりから太腿へ滴ろうとするほどの水をたっぴりと含んでいた。翔はそこから彩夏の心に募っていた気持ちを垣間見た。

会えない時間の思いは、翔も同じだった。そして、あの日の出来事から今までの間、社会人になった彩夏の気持ちが自分から離れていくことを恐れていた。

そして、1ヶ月半ぶりに彼女に会ったとき、自分の変わらぬ気持ちを、自然にどう表現したらいいか、翔は考えあぐねていた。

でも、そんな翔の気持ちを思い、そんな心配しないで、と彩夏は言った。こんな恥ずかしい失敗をしてまで、それを身をもって示してくれた彼女のやさしさが、翔はともうれしかった。

「これで最後・・・だね」

翔は、最後に彩夏のショーツを干そうと背伸びしたとき、一瞬打ち寄せた尿意の波の高まりに、膀胱の筋肉を弛緩させた。

《彩夏・・・、ほんとにありがとう・・・》

あのとと同じように、解放感とともに自分の下腹部に温かいものがあふれていくのを、翔は感じていた。

（「時間旅行」終わり）

心の束縛（総括）

心身の不調からおしつこを我慢できない彼女が、彼の前で「おもらし」しそうな切迫した場面に臨んだとき、過去に体験した気持ちを蘇らせ、複雑な感情を交錯させる様子を描いた、短編恋愛ファンタジー。

過去の失禁がトラウマとなって、長い時間おしつこを我慢できない綾乃。彼氏の稜から旅行に誘われたとき、綾乃は正直にそのことを打ち明け、稜はそれを受け入れる。

旅行の当日、稜はこまめに休憩するなど気を遣ったが、かつての不安体験から綾乃はパニックになってしまい、トイレの手前で我慢できなくなる。

切迫した瞬間、絶望感や恥ずかしさとともに、それらとは全く違う感覚が綾乃の心をよぎる。遠い昔におもらししたときも同じ感覚だったことを思い出す。

そして、その後のふたりの行動と、その思いとは・・・

心の束縛（思い出の優しさ）

長時間車に乗ったり、トイレのないバスやベルトサインの出る飛行機などが苦手です。心因性と思われる軽度の頻尿が時々出てしまうからで、心や身体の調子によっては続けて20分と我慢できないこともあります。友人などには絶対に言えませんが、過去におもわしたこともあります。

一方で、おもわしたときの温もりや、やさしく世話してもらったこと、周囲の反応などから、自分が守られている感じや、注目されている感じなど、よく分からないけれど不思議な感じがしたことをずっと覚えていました。そのうち、空想の場面ではおもわしるのも悪くないと思うこともありました。実生活では漏らしたらどうしようと思病になる反面、夢の世界では漏らすという物語も素敵かもという二面性を持っていました。

最近になって、心因性の頻尿や尿失禁を抱えて困っている、私と同じような人がたくさんいることをネットで知りました。みなさん、漏らすのが怖くて、その不安や恐怖がさらに尿意を高めて悪循環に陥る、そのことに悩んでいます。私もそうです。

仕事や公式行事など、実生活ではそういう悩みを抱えている反面、プライベートでは、過去自分がおもわしたことが、恥ずかしさで真っ白だったはずなのに、思い出される感触は、なぜか優しく、心地良くて、そこに下腹部の苦しさを重ね合わせた自分のことを「かわいい」と感じるがあります。それを思い出して、わざとおもわしすることもありました。

でも不謹慎かもしれませんが、漏らしてはいけないときに「漏らしたっていい」って思うことで気が楽になることもあります。私は実生活でときどき不安になると、「スプラッシュ」のような素敵なストーリーを頭の中で考えて、それで気を落ち着かせることもあります。そうすると不思議に我慢できるときもあります。

この症状を抱えている人は、やはりトイレのことを考えてしまい、デートなどにも及び腰になってしまいます。でも、彼氏、彼女との間なら

「病気なんだから、漏らしたっていいじゃない」

と思います。彼（彼女）がきちんと理解してくれるのはもちろんですが、それ以上に、そういうあなたを放っておけない、かわいらしい、魅力を感じてくれる彼（彼女）もきっといるはずです。その人の前なら、もしおもらししてしまった、その衝撃をきっかけにドラマが生まれるかもしれません。そうしたら、自分の弱点だと思っていたものが、強みになることになります。

この症状が心因性ののであれば、原因は自分の心のなかにあり、すべては自分の気持ち次第なのだと思います。私も、そういう割り切りのもと小説「スプラッシュ」を書いています。登場してくるのはそういう症状を抱えた人ばかりではありませんが、おしっこなどの悩みを抱える人が気持ちの持ち方を変えることで、幸せになれるストーリーを浮かべては書いています。

おしっここの悩みに対してここまで割り切れるのか、ということにはもちろん異論もあるかと思っています。私の小説が助けになれば、とは

思っていないんですが、私と同じ症状を抱えている人のうち、何人かの方でもいいので、少しでも心が前向きになるためのきっかけとなれば、と思っています。

心の束縛（旅行の誘い）

「あ、嫌ならいいんだ、別に、無理になって訳じゃないし・・・」

綾との間が急に気まずくなったことに、綾乃は哀しくなった。

そうじゃないの、綾くん、ごめん

綾からの不意の旅行の誘いが、綾乃にはとてもうれしかった。しかし、にわかに返事ができなかった。そのことで、せっかく誘ってくれた綾のことを傷つけてしまったかもしれない。綾乃は泣き出した。

「どうしたの、綾乃・・・」

綾乃は、自分が長い時間おしっこを我慢できないこと、特に長時間トイレのないバスや車に乗ると、すぐにトイレに行きたくなってしまふことを正直に話した。

確かに、デートの最中も、綾乃は時々トイレに行くことがあったことを、綾は思い出した。

「だからもし、私と行っても、迷惑かけちゃうし、つまらないかなって思ってた」

「そうか・・・、そういうことだったの？　なんだ、僕と行きたくないのかなって思ってた、傷ついちゃった」

「ごめんね」

「全然心配することないよ。途中、たくさん休憩しながら運転してあげるからさ。もし、僕と行くのが嫌で断ったのでなければ・・・、いっしょに行かない？」

綾乃は笑ってうなずいた。

旅の当日、2時間ほどのドライブの途中、綾はさりげなく飲み物やおやつを買っふりをして、時々コンビニや道の駅に立ち寄った。

そのとき決して「トイレ」のことを口にしないのが、綾の思いやりだった。綾乃は綾が買うものを選んでる間、トイレに行った。綾乃の表情や仕草もごく普通で、綾は安心していた。

その後、ふたりは道沿いのカフェでランチを摂った。

綾乃を乗せてカフェをあとにした綾は、残り1時間ほどの道のりを、時間を短縮するために高速道路に乗った。

ふと膀胱の奥が疼く感じがしたのと同時に、綾乃に不安が襲ってきた。高速道路では、車を降りることができず、しばらくトイレもない、その環境が綾乃の不安をあおった。

心の束縛（あの日の記憶）

「綾乃、大丈夫？」

修学旅行のバスの窓側の席で、不安からくる尿意に身体を硬直させ、額に脂汗を浮かべる綾乃がいた。

隣の親友の優子が心配してかけてくれる声に、綾乃はうつむき加減に黙ってうなずくしかなかった。

周囲の友達が綾乃の異変に気づきはじめたが、優子は、綾乃がバスに酔ったようだと話した。

優子はそつと綾乃に耳打ちして、彼女のスカートをたくしあげ、もらったビニール袋にスポーツタオルを重ねたものを、彼女のおしりの下に差し入れた。

綾乃は目的地に着くわずか手前で、それが温かくなるのを感じた。

「綾乃、気持ち悪いみたいだから、私たち残ります」

優子がそう言ってくれたおかげで、他の誰の目にも感づかれることはなかった。

綾乃、ちょっと吐いちゃったみたい

綾乃のショーツはタオルにくるんで袋に入れ、あたかも吐いたものを処理したように見せかけて、優子がトイレのゴミ箱に捨ててくれた。

こうならないように気をつけていたのに・・・

綾乃は悲しくなって泣いた。

学校生活で綾乃がおもらしたのはこれが初めてではなかった。中学2年生のときの学校での「失敗」をきっかけに綾乃はおしっこに対してナーバスになっていた。

そして高校生になって多感な時期を迎えるにつれ、それは次第に心因性の症状に変わっていった。気をつけていたつもりなのに漏らしてしまったこの日の経験が、この後の彼女をいっそう苦しめていくことになった。

心の束縛（トイレに行っただばかりなのに・・・）

あの修学旅行の日の記憶が綾乃の不安を呼び覚ました。そして悪いことに、ランチで飲食した後だったので、綾乃の尿意の高まるスピードが早かった。

高速道路に入っすぐ、綾乃が両脚をくねらせているのを綾は見逃さなかった。ふと横顔を見ると、綾乃はまっすぐ前を向いたまま険しい表情をしていた。

さっきトイレに行っただばかりなのに・・・

綾は口には出さないまでも、綾乃の身を案じた。カフェを出てまだ20分ほどしか経っていなかったので、さすがに彼女に声をかけることは憚られた。

さっきトイレに行っただばかりなのに・・・

綾乃の思いも同じだった。午前中は調子が良かったので油断してしまっていた。何がいけなかったのか思い返しはじめた。食後のコーヒーは飲まなかったが、スープは飲んだ。そういえば、店に入れることに安心して、ランチの前に車の中で、喉の渴きを癒すため飲み物を飲んだ。それがいけなかったのだろうか・・・

綾乃は自分の行いを後悔していた。そのストレスがさらに綾乃の尿意を高める悪循環となっていた。

さらに10分ほどして、ついに見かねた稜が声をかけた。

「綾乃・・・、おしっこ大丈夫？」

その言葉をかけた直後、稜は自分の言ったことを後悔した。

綾乃は自分の中で、不安と尿意に闘っていた。なるべくおしっこ
ことを気にしないよう、気を紛らす努力を重ねていた。そしてそれ
は綾乃自身の問題であり、人から感づかれないよう、自分だけで解
決しようと考えていた。

しかし、稜から声をかけられたことで、自分の尿意を見透かされた
思いになり、綾乃はもう気を紛らわすことができなくなった。

どうしよう・・・

綾乃は切迫する尿意に、自分が次第にパニックに近い状態になりつ
つあるのを感じていた。顔色は青くなり、手には脂汗がにじんだ。
高速道路の標識を見ていたが、さきほどからパーキングエリアを示
すマークは認められなかった。

そんな綾乃の様子を時おり横目で見ながら、稜は自分のことのように
心配して車を走らせた。最寄りのインターまでの間パーキングエ

リアがないことは綾も分かっていた。綾乃の心を刺激しないように黙っているほかない自分が、情けなかった。

綾乃、しっかり・・・

綾は祈った。

「綾乃、途中で降りて、トイレのあるところ寄るから・・・、ね」

綾乃は目を伏せたまま2、3度うなずいた。自分の切迫した尿意を完全に彼に見透かされて、彼女は完全にパニックになっていった。

ここで漏らしちゃうかも・・・そしたら綾くんに呆れられて、嫌われちゃう

車に酔って強い吐き気を催し”ここで吐いちゃうかも”と思ったときのような、強い不安と恐怖が彼女を襲っていた。どこかのコンビ二に着いても、無事降りてトイレまでたどり着けないかもしれない、そしたら、もっと大変なことになってしまふ、自分はどうしたらいいのか・・・

綾乃は恐怖心を増幅させ、そして尿意を極限まで切迫させていた。

綾が選んだのは、道沿いに見えたファッショホテルだった。そこならば車を降りたときに万一失敗しても、誰にも見られずに済む配慮からだった。決して疚しい動機ではないことは、綾乃にも十分分

かっていた。ガレージに車が止まった。

「綾乃、行くよ」

綾乃はなんとかドアを開け、地面に脚をつけると、パニックで血の気が引いていたせいで、脚も下半身も、ふだんの感覚とは全く違うことに気がついた。それでも稜に促され、取るものも取りあえず車から降りると、綾乃は地に足がつかない感覚で、稜のあとから階段を上がった。

「大丈夫？」

「うん・・・」

よく分からないが、不安や恐怖は少しやわらいでいき、意外と身体は楽になっていく感じがした。この分ならきつと我慢できる・・・、綾乃は淡い期待を持った。

「安心して、僕がついてるから」

彼の言葉が耳に入った。

だが、階段を上りきったとき、綾乃は両脚の筋肉が緩むのとあわせると、まるで膀胱が勝手に収縮し、括約筋を押し広げるようにして、自分の意思と関係なくおしっこがあふれそうになるのを感じた。

安心して、僕がついてるから

さっきの彼の言葉が耳に残った。綾乃は立ち止まった。

綾乃は思い出していた。

心の束縛（初めての失敗）

急いで階段を上りきって見えてきたトイレの前には、誰もいなかった。ほっとした瞬間、膀胱の筋肉を押し広げていく猛烈な感覚に襲われた。綾乃は、その急激な尿意に身体を対応させる術を失ってしまった。

おしっこ、したいかも・・・

午後の5、6時間目の学年集会の途中、トイレ休憩の後いったん全員が立ち上がり整列し直したとき、綾乃は自分の尿意がかなり高いらしいのに気がついた。ふたたび体育すわりになると、綾乃はそのことを意識しはじめてしまった。学年集会の議事を聞きながら、一生懸命ほかのことを考えようとするもののうまくいかず、尿意の意識だけがどんどん膨らんでいった。

綾乃は休憩時間に友達とのおしゃべりに夢中になってトイレに行かなかったことを後悔した。そのストレスや不安がさらに彼女の尿意を増幅させていった。綾乃は集会どころではなくなっていた。

もう少しで終わる・・・その期待に反して、集会の進行が遅く、議事が終わる気配が感じられなかった。この場でおもらしたら・・・綾乃はパニックになっていった。チャイムが鳴っても集会は終わらなかった。

綾乃はためらったあげく、意を決して

「トイレに行ってもいいですか？」

と先生に言っただけでその場を退出し、トイレへと向かった。

しかし渡り廊下に出て、綾乃はいっぺんに血の気が引いた。1年生の授業がちょうど終わり、渡り廊下やトイレの回りには、かなりの生徒がいた。あのトイレに入って、もし個室が並んでいたら絶対に我慢できない・・・綾乃は思った。

綾乃はパニックで身体が硬直したのを感じながら、ひと気のないはずの2年生の階のトイレを目指した。一気に階段を登ったあと、廊下の先に自分が入れるトイレが見えた。トイレの前に誰もいないのを見て、ほっとした瞬間、綾乃の願いは叶わなくなった。

そこには、猛烈な勢いで高まった尿意に疲れきった身体が耐えられず、ひたすら身体の気持ちよさに身を任せてしまった綾乃がいた。圧迫されたブルマーからあふれた水流が幾筋にもなつて脚を伝わり、ソックスはもちろん、体育館履きまでぐっしょりと濡らしながら、足元に水たまりが広がっていった。

でも、綾乃は不思議と悲しくはなかった。おもらしをしながら、自分がどこか遠くを見ていたような気さえた。きちんとトイレに行かなかった後悔はあるものの、ベストを尽くしたという思いがあったからかもしれない。

しかし、綾乃ははっとした。ブルマーやソックスは紺色で目立たないものの、廊下に広がった大きな水たまりは明らかにおもらした

ことを物語っていた。

そこへ偶然、白衣を着た若い男性が通りかかった。理科の非常勤の講師で、ふだんあまり話したことのない物静かそうな先生だった。彼は一瞥して、彼女が「失敗」したらしいことと、ブルマーの色から彼女が2年生であることが分かった。

頭が真っ白になり、どぎまぎする彼女に、彼はやさしく言った。

「大丈夫、安心して、ここは僕がなんとかするから。まだ学年集会終わっていないから、はやく着替えて帰りなさい」

綾乃は、駆け足で教室へ行き、その上からスカートと制服を着ると、自分の荷物を持って、みんなより一足早く家へ帰った。

誰かに話してしまったのでは・・・

翌日、綾乃はドキドキし、不安を抱えながら学校へ行った。最初は、あの先生が誰かに話してしまい、みんなから自分が「おもらした女の子」と見透かされているような気がして仕方がなかった。

しかし、その先生は誰にも話さなかった。早退したことも、その日は体育館解散だったため、特に怪しまれることもなかった。おもらしは、綾乃だけの秘密となった。

心の束縛（相反する思い）

それから数日経ち、自分のしたことの大きさや恥ずかしさといった気持ちが落ち着くにつれ、綾乃はそれらとは違う感情が芽生えはじめていた。

その週末、綾乃は自分の部屋で、洗濯の終わった体育着に着替えてみた。手を添えてみると、その中であふれるように流れていた「温もり」が、なぜか懐かしいことのように蘇ってきた。あのときは、恥ずかしさで真っ白だったはずなのに、思い出される感触は、なぜか優しく、心地良かった。綾乃は姿見に映る、あのときと同じ自分の姿に、切ないほどの膀胱の苦しさを重ねあわせて、「かわいい」と感じていた。

そのとき、自分のことを思い、自分が恥をかかないように配慮してくれた、その男の先生の優しい一面に思いがけず接することができたことが、綾乃にとって優しい思い出となっていた。その思いは、こうして恥ずかしいおもらしをしてしまった自分のことを、あの先生にも、そして他の誰かにも見てほしい、そして想像してもらいたい、そんな気持ちにも発展していった。

しかし、それは私生活でのひとときの「淡い夢」であった。実生活になると、その夢はまるで何事もなかったかのごとく払拭された。我慢できない不安が増幅し、学校でおもらししてしまったことは紛れもない事実だった。このことがトラウマとなり、綾乃はそれ以後トイレに行けない状況であることを感じると、そのことを過剰に意識してしまい、

おしっこが我慢できなかったら、どうしよう

という不安や恐怖が先に立ってしまうようになった。

そして、高校生になり修学旅行で起こした失敗が、彼女の心を傷つけ、その症状をさらに悪化させてしまった。

それは、それまで彼女が時折抱いていた「淡い夢」さえも、心の奥に閉じこめさせてしまった。

安心して、僕がついてるから

階段を上がったホテルの部屋で、切迫した尿意に身体を硬直させ、漏らしてしまう恐怖と絶望感に苛まれる一方で、綾乃は彼の言葉を反芻しながら、相反する気持ちを感じていた。

それはしばらく心に閉じこめていた気持ちだった。

あのときの温もりを感じたい、そして私のことを見てほしい、彼だったら、きちんと見てくれるかも

彼の優しさを心の底で求めながら、下腹部が切なく叫び、尿意に耐え、もうすぐ恥ずかしい姿になるうとしているいまの自分自身が、綾乃はかわいらしく、愛しく、そしてはかなく思えた。

ねえ、綾、そうしてもいいのかな？

綾乃は心の中で綾に訊いた。

ふと、綾乃の肩を抱き、背中をさすりだす彼の両手が、その答えを示していた。吐きそうな子に吐かせてあげるように、苦しんでいる彼女の身体を、心ごと楽にしてあげたい、彼はそう言っているように思えた。

綾乃、そんなに苦しまなくていいんだよ。綾乃のありのままが好きなんだ。綾乃の心の中にある、思い込みや不安を僕が受け止めてあげる。だから・・・

心の束縛（エピソード）恋のプロローグ

それは静かだった。かすかな水流と、綾乃の背中がさすられる音だけが部屋に響いていた。綾乃の足もとを中心に生まれた水たまりが、陽の差し込む木の床にまるく浮いてゆつくりと広がり、稜の足もとを濡らしても、彼は動こうともせず、綾乃をしっかりと抱いていた。

綾乃のワンピースから伸びる Cotton のトレンカは、黒色だったためさほど目立たないものの、太腿からかかにかけて、無数の水流のあとが残っていた。かすかな音が止んだあとも、水たまりはまだゆつくりと広がり続けていた。彼が背中をさする手が、ゆつくりと止まった。

ふーっというため息とともに、綾乃は、横顔で彼に目配せして微笑みながら、自分の足もとに目をやった。まるで束縛と葛藤から解放された安堵感が全身を包んでいた。今まで何度かおもらしはしたことはあっても、こんなにうれしくて爽やかな思いをしたのは初めてだった。

「ちょっと待ってね」

稜は、すぐにバスルームからバスケットに入った白いバスタオルを持ってくると、1枚を暖かい窓辺の床に敷いて、その上に綾乃を立たせ、もう1枚を綾乃のつくった大きな水たまりにやさしく覆いかぶせて隠した。

綾はワンピースの裾をたくし上げて綾乃に持たせ、ゆっくりと両脚に張りついたトレンカを下ろしていった。透明な水をたっぷり含んだ綾乃の白いショーツからは、まだ時折、水滴を太腿に伝わせていた。

解放された感覚が落ち着くにつれ、次第に高まっていく恥ずかしさを感じていたとき、そんな綾乃の気持ち察して綾が声をかけた。

「綾乃・・・、こんなこと言うと誤解されるかもしれないけど・・・、綾乃がうらやましい」

綾乃は彼の言葉に耳を疑った。綾は綾乃の目をちらつと見たあと、服を脱がせる手を休めずに言った。

「僕も、トイレを意識しちゃって、無性におしっこしたくなったときがあつて・・・」

「綾くんも・・・?」

綾乃が小さな声で訊いた。彼は続けた。

「そのとき、我慢できなくて・・・」

「漏らしちゃた・・・?」

「うん・・・でも、あとから思い出して、こんなふうに世話してもらいたいって、思ってた」

「綾くん・・・」

「だから、綾乃の気持ちはよく分かっているつもり。きっと恥ずかしいと思うけど・・・。それに、いま綾乃はすごく素敵な自分の魅力を存分に僕に伝えてくれているから・・・、だから安心して」

綾は綾乃のトレンカをかかとまで下げ終わった後、ショーツを下げると、一緒に彼女の足首から外した。そして、両手にタオルを持ち、片方で下腹部を押さえて水分を取りながら、もう片方をおしりや太腿に回し、濡れたところを残さないように丁寧に拭いた。

彼の慣れた段取りや手つきを見て、

彼も私と同じだったんだ・・・

と、綾乃は思った。

さっきまで綾乃が感じていた恥ずかしい気持ちも、少し甘酸っぱい解放感に変わっていった。彼女の足もとで、内股ぎみにしゃがみながら世話してくれている彼のジーンズの腰つきが、かわいらしいとさえ思えてきた。

綾は立ち上がると、そっと綾乃の背中を抱きしめ、そして言った。

「綾乃は・・・、僕の前では無理におしっこを我慢しないでいいよ。漏らしたらどうしよう、なんて思わなくていいからね」

無理しない自分を受け入れてもらうことが、彼との距離をぐっと近づける・・・綾乃はその意味をかみしめていた。

ふと考えて、綾乃は言った。

「綾くんもね・・・おしっこ我慢できないときは無理しないで。綾くんがおもらしたときは、私が着替えさせてあげる・・・」

綾乃の明るい声に、稜も笑顔でうなずいた。

（「心の束縛」終わり）

卒業旅行（総括）

彼が突然してしまった「おもらし」が、衝撃的に彼女の心を揺さぶり、ふたりの絆が深まっていく様子を描いた短編恋愛ファンタジー。別れる前の最後の思い出になるかもしれない、ふたりの卒業旅行の日、宿泊先のコテージの前で海斗が「失敗」してしまう。

紗季は、海斗の仕草を察してやれなかった責任から、献身的に彼の着替えの世話をするうち、彼への思いやりや謝罪などとは明らかに違う感情が、激しく彼女の心を叩きはじめるのを感じる。

そして恥ずかしい失敗をしたにもかかわらず、存在がどんどん大きく見えてくる海斗に、心が乱され動揺していく紗季。

葛藤の末、紗季がとった行動と、その思いとは・・・

恥ずかしいはずのおもらしが、恋愛を深めるきっかけになることって、きっとあると思います。

幼い頃のような純粋な気持ちに帰ってみませんか？

卒業旅行（揺さぶり）

人前でおもらししてしまった経験をお持ちの方は、きっとお分かりだと思います。

おもらしをしてしまつて恥ずかしいのは、禁じられた自分の生理現象によって性的な部分を含む下腹部を濡らしてしまうからだと思います。しかも、その後は否応なく服を脱がされ、その下腹部を露わにされてしまうという動作が伴うことも分かっています。周囲をドキッとさせるのはきつとそのためだと思います。

そして、それはあるとき思いがけなく、突然やってきます。

「暖かな季節」で、ボーイフレンドの失敗と着替えの場面に直面した彼女は、幼な心にも大きな衝撃を受け、様々な思いを巡らします。

もし、大人になってから、親しい彼氏が、突然何らかのはずみでおもらしをしてしまい、その着替えの世話をする事になったら・・・

そのとき彼女が静かに衝撃を受けていく様子、そしてその気持ちはどういうふうに恋愛を進展させていくのか、それを丁寧に描いてみたいと思いました。

卒業旅行（おしっこしちゃった・・・）

「どうしたの、海斗くん・・・」

トランクから荷物を取り出して、ふと紗季が振り向いたとき、車のドアに向かって立ったままスキニージーンズの太腿を瞬く間に濡らして、靴からたくさんの水をあふれさせている海斗がいた。

「漏らしちゃったの？」

うつむいてうなずく彼の足もとの水はたちまち、アスファルトの上を影のように広がっていった。

「おしっこしたくなっちゃった・・・」

助手席の海斗がそんなことを口にしたのはここへ着く20分くらい前の山道でのことだった。そこでは車を止められなかったので

「もうちょつとだから・・・」

と一言だけ言って、紗季は走り続けた。海斗はそれ以上何も言わなかった。

《見えないの、海斗くんの愛が・・・》

卒業旅行。ひょっとしたら、それはふたり最後の思い出の旅になる、そんな暗黙の予感があった。

紗季と海斗、ふたりは同級生で交際は長く、互いを大切に思う気持ちは強かったが、素直に心の奥底を打ち明けることができず、これ以上の恋の展開が期待できなかった。

別れると決めていたわけではなかったが、いまのふたりの関係は、間もなくふたりにやってくる卒業や就職といった大きな環境の変化の波に、もろくも崩れ去ってしまうのではないか、そう感じられていた。

《紗季、最近なんだか冷たいし・・・》

晩秋の高原リゾートに決めたのも、いつか行ってみたいとふたりで相談したことがあったからだ。就職したら、この季節に旅行なんてできないかもしれない。

だが、目的地が近づくにつれ、少しずつ気まずくもの哀しい気持ち募っていったのも、次第に秋が深まりゆく周囲の景色のせいだけではなかった。それは紗季にとっても、また海斗にとっても同じだった。

山脈の頂からは雪雲が沸き立ち、日が傾きあたりを黄色く染め出すにつれ、車の中にも寒気が入ってきた。

《なんとかしないと、まずいかも・・・》

まるで今のふたりの状態を暗示するようなカーブが続き、紗季は慣れないハンドル操作の合間に暖房をセットした。しかし、車中の気まずさやもの哀しさも手伝って、身体の冷えは癒されることなく、海斗の尿意を次第にそして確実に高めていった。

コテージのまわりは、すっかり落ち葉に覆われていて、車を止めるところだけが綺麗なアスファルトを覗かせていた。車をそこに止めると、紗季は海斗の身体を気にかけることなく、ひとりで勝手に降りて、後部のトランクの荷物を取り出しに行ってしまった。

《紗季・・・》

ひとり残された海斗が助手席のドアを開けて車を降りると、ふと吹きだした風に舞う落ち葉のざわめきと、冷たい空気が彼の身体を包み込んだ。

車のほうに向き直ってドアを閉めるまでのほんのわずかの間に、これらの刺激と姿勢の変化によってひととき高まった膀胱の苦しさ・

《紗季のせい・・・》

それが瞬く間に自分の下腹部からおしり、さらに両脚にかけて熱いものが流れていく感触に変わったのを海斗は感じた。それはまるで今まで募っていた心のストレスまでが絞り出されていき、全身の力が抜けて楽になっていくような気持ちよさが伴っていた。

《温かい・・・》

その気持ちよさに身を任せるのと引き換えに、猛烈な恥ずかしさが襲ってくることを分かっているながら、それでも彼の身体は温かさを求めるように下腹部に熱い流れをうずまかせていった。動けない海斗はドアを閉めたままの両手のやり場を探した。

「おしっこ・・・、しちゃった・・・かも」

そう言ってしなやかな両手を首筋にかざしながら、子どものようにおしっこを漏らしている海斗に、紗季はびっくりした。海斗本人も恥ずかしいはずだが、紗季のほうがむしろその信じられない光景に衝撃を受けていた。

細身のジーンズは両脚のうしろ全体が濡れて光り、裾からだけでなく膝のあたりからも水が落ちていくのが分かった。やがて水流が止まると、陽射しに反射してきらきらと光っていた彼のジーンズは、つや消しのような色へと変わった。

「漏らしちゃったの？」

紗季の問いかけに黙ってうなずいた海斗は、華奢な背中を押されるようにしてコテージのほうへ一歩一歩歩いていった。

水をたつぷり含んだ海斗のスニーカーは、歩きたび”ぎゅっ、ぎゅっ”という音をさせながら、あふれ出た水がアスファルトに足跡を

残
し
て
い
っ
た
。

卒業旅行（高鳴りゆく胸）

「ごめんね、海斗くん。ちゃんと気づいてあげられなくて・・・」

まさか海斗がそんなに我慢できない状態だったとは紗季は思わなかった。しかし、それを察することができず、その結果彼がこんなに恥ずかしい思いをしてしまったことを、紗季は後ろめたく思った。

急いで玄関にバスタオルを敷き、海斗のスニーカーと靴下を脱がせて立たせると、紗季はしゃがんで、彼のジーンズのホックを外しながら、考えはじめた。

《海斗くん、いったいどうしちゃったんだろう？》

紗季がファスナーを下ろすと、ジーンズに入れていた彼のコットンのシャツが見えてきた。それはショーツに重なっていたため巻き添えになる形で、ひどく濡れてしわになっていた。

「海斗くん、おしっこしたいって、言ってたのにね」

そう言いながら、紗季は海斗のジーンズを下げはじめた。濡れた細身のジーンズは脚に張り付いて脱がせにくく、紗季は少しずつ下ろしていった。

海斗は、恥ずかしい失敗をしたにもかかわらず、妙にすつきりした気持ちに包まれていた。おもらしして、これから紗季に服を脱がされて、肌を徐々に見せることになることを、不思議に素直に受け入れていた。着替えを持って自分だけでバスルームで着替えることもできたのに、あえてそうせず彼女のなすがままに身を委ねた。

「でも、そんなにしたいんなら、漏らしちゃう前にどうしてそう言わなかったの？」

海斗は返事に困り、あたりは沈黙した。

やがて、シャツのむこうに隠れた薄いグレーのショーツと、女性のように綺麗な太腿が紗季の目に映った。紗季はどきどきしそうになる気持ちを振り払うように、着替えの手を休めずに続けざまに彼に声をかけた。

「海斗くん、車を降りたとき、安心しちゃったのかな？」

海斗も、自分の肌が露わになるにつれ、次第にこみ上げてくる恥ずかしさから逃れるように、自分を客観的に思い返すように話し出した。

「車の中でお茶を飲み過ぎたのが、いけなかった・・・のかな？我慢してたつもりだったんだけど・・・」

海斗のジーンズはくるぶしまで下げられ、紗季の手によって彼の脚から片方ずつ順番に外されていた。

紗季も客観的に自分の経験を思い返すふりをして言った。

「我慢してたつもりなのに・・・しちゃう、そういうこと、あったかも・・・」

紗季にとっても彼のおもろしは衝撃的な出来事だった。にもかかわらず、ときばきと彼の服をどんどん脱がせている自分に、紗季自身が驚いていた。おもしろしてしまった彼のことを可哀想に思い、そうさせた自分が悪いと思いながらも、何か初めて見る、あるいは初めて体験することに否応なく気持ちが高揚していく自分がいた。

「海斗くん、このシャツも着替えないとダメね」

高揚する自分の気持ちに紗季が罪悪感を覚えたのも確かだった。それゆえ、とにかく彼の着替えという仕事に没頭することで、その気持ちを誤魔化そうとしていた。

しかし、海斗が、裾の濡れたシャツを脱ぎはじめると、彼の身体にぴったりしている薄いグレーのショーツが、前の上の方からおしりの下までぐっしり濡れている様子が、紗季の目に飛び込んできた。

「紗季にもあったの？　そういうことって」

海斗が泣きそうな声で、紗季に訊いた。

恥ずかしそうに片ひざをちよつと曲げた綺麗な太腿が、女性のよう
に魅力的で深いVのラインをつくっている姿に、紗季は胸が高鳴つ
た。その思いを見透かされないように、紗季は海斗の承諾を待たず
に、彼が痛がらないようショーツのゴムをまず前に引いて下ろし、
続いてうしろに手を掛けて素早く下げた。

紗季は、表面上は至って冷静に、海斗の裸を気にも留めないふりを
して、両手でタオルの両端を持ち、一方を下腹部にあて、押しつけ
るようにして水分を取りながら、もう一方の端をおしりや太腿など、
ほかの濡れているほうに回し、丁寧に拭いた。

「恥ずかしい・・・」

海斗は声を震わせてそう言つと、顔を両手で覆っていた。

紗季がこんなふうに彼の裸を見るのも初めてだった。いまふたりの
身に実際に起きていることが、紗季はまだ信じられずにいた。

紗季は精一杯の平静を装つて、海斗に接した。

「ううん、失敗しちゃうのは誰にでもあることだから、恥ずかしく

ないから気にしないで……。すぐに穿かせてあげるから待ってね」

紗季は、新しいショーツを用意すると、海斗が穿きやすいようにくるくると器用に丸めて片方ずつ裾を広げて海斗の足もとに差し出した。彼がそれに足を入れると、紗季はするとショーツを上げ、海斗の下腹部とおしりをやさしく、すっぽりと覆った。

「よかった、これでだいじょうぶ」

きつと恥ずかしい思いをして傷ついている彼の心を癒そうと、紗季は彼のすっかり冷たくなったおしりに両手を当てて、しばらくの間暖めた。しかし、それで誰よりもほっとしたのは、紗季自身だった。

卒業旅行（私、無理して、絶対・・・）

替えのズボンや靴を持ってきていなかった海斗をコテージに残し、紗季はひとり、コテージ村センターのランドリーコーナーにいた。

つま先まで濡れた海斗のスニーカーを靴の洗濯機に入れ、ジーンズ、シヨーツ、シャツ、靴下などをひとつひとつ、洗濯乾燥機に入れるためバスケットから手に取るたびに、紗季にはさっきまでの衝撃的な光景が鮮やかによみがえってきた。激しく濡れていくジーンズ、靴からあふれ出す水、ぐっしょり濡れたシヨーツ、彼の綺麗な太腿とVライン、そして・・・。

それらはすべて自分のせいだったり、自分が進んで世話したから目にしたことなのに、まるで傍観しているかのような目線で繰り返し繰り返し、続けざまに紗季の脳裏に浮かんできて、彼女の心は乱されていった。

そこには、きつと恥ずかしい思いをして、気丈に振る舞っていてもきつととても傷ついている、海斗の心を思いやる気持ちももちろんあった。しかしそれだけではないと感じていた。思いやり、感情移入、謝罪・・・、それらの類とは明らかに何か違う感情が、激しく彼女の心を叩きはじめていた。

「おかえり、紗季、いろいろありがとう」

ランドリーから帰ってきた紗季を迎えた海斗の明るい声に、紗季ははっとした。

空のバスケットを玄関に置き、テーブルの椅子に腰掛けた紗季の前に、キッチンからアイスコーヒーとグラスを持って海斗が現れた。

身体にぴったりしたタートルネックの白いセーターから、ブルマーのように綺麗なVラインを醸し出している紺色のショーツを見せながら、恥ずかしげもなく立つ彼の姿に、紗季はどきつとした。

「ううん・・・」

一言だけそう応える紗季の斜め横に海斗が腰掛け、一緒にコーヒーを飲みながら、言った。

「ほんと、ごめんね紗季、さっきはびっくりさせちゃって」

「うん・・・でも、海斗くん・・・どうしておしっこ漏らしちゃったの？」

「わかんない・・・でも、なんだか漏らしちゃってすごくすっきりしたんだ。ちょっと恥ずかしかったけど・・・べつに強がっているわけじゃなくて」

海斗が、ショーツから伸びる長い両脚の内股をさするような仕草で、漏らしたときの様子を表現する姿に、紗季は胸が高鳴った。その一方で、その気持ちを打ち消そうと、彼のそういう態度を否定する思いで言った。

「恥ずかしかった・・・でしょ、すごく？」

すると、すかさず海斗が明るく答えた。

「恥ずかしいよね。まさかこの歳になって漏らすとはね」

彼は、まるで車酔いしていた子がたくさん吐いてすっきりしたあとのように、急に快活になっていた。

《なんで・・・そんなに元気に振る舞えるの?》

《さっき脱がせていたときは、あんなに沈んで、傷ついていそうだったのに・・・》

元気になった海斗を見て、紗季は少し安心したのと裏腹に、あれほど恥ずかしいはずのさっきの出来事について、避けようとせず堂々と話す海斗にどぎまぎした。まるで、お世話してあげた小さな男の子が、急に素敵な男性になったかのように、紗季の気持ちは混乱した。

《そんなに爽やかにしていられたら、こちらが逆になんだか切なくなる・・・》

《ねえ、さっきみたいに帰ろうよ。もう一度、おもらしたら・・・そしたらまた、着替えさせてあげるのに・・・》

海斗が言った。

「でも、紗季、ほんとにありがとね。あんなにしてもらって・・・ちよつと格好悪いとこ見せちゃったけど、いい思い出になった気がする」

《え、そんなのないと思う。もうお別れみたいに言うの・・・いい思い出だなんて・・・》

《私、どうしちゃったんだろう？ 海斗に惹かれてる？ 焼きもち焼いてるのかな？》

《ここへきて、いまさらどうして？ 私どうしたらいいの？》

「そうね、いい思い出・・・かも」

紗季は笑顔を引きつらせながら、そう言っておもむろに立ち上がると、海斗に背を向けて、暮れかかる夕日の差し込む窓辺にもたれかけた。

目の前の木々はすっかり葉が色づき、地面はまるで落ち葉のパレットだった。紗季はそれを眺め、黙った。

ずっと海斗の世話に気持ちを集中していた紗季は、いまはじめて自分の尿意がすごく高まっているのに気がついた。だが、それはきつと窓辺の冷気のせいだろうと思っていた。

《私、無理してる、絶対・・・》

《海斗くんは最後に勝手におもらしして、勝手にびっくりさせて、勝手に私に甘えて、勝手に私にショックを与えておいて、勝手に私を魅了して、そして別れるんだ》

《海斗くん、私だけ後ろ髪引かれる思いをさせるなんて、ひどい・・・、ひどすぎる》

まるで大きくなった彼がどんどん離れていって、自分がどんどん小さくなり、置いていかれそうな気がした。紗季は、身体から何かがこみ上げてきそうな感覚に襲われた。

そのとき、海斗が紗季に訊いた。

「そういえばさっき・・・脱がせてもらってたとき、紗季にもこんなことあったって言ってたけど、ほんとなの？」

紗季は、はっと気づいた。

《そのとき心の中にあつた、哀しさや淋しさのような気持ち・・・》

《大切な人がどこかに行ってしまいそうな、自分を取り残されそうな不安や怖さ・・・》

《子どもだったら、おもしろしちゃうかのような気持ち・・・》

《でもその人に甘えれば・・・直るんだよね》

《そうだ・・・さっきの海斗くんもこういう気持ちだったんだ》

紗季は、何かがこみ上げてきそうな感覚を抑えながら、海斗に背を向けたまま、話しはじめた。

「そういうこと・・・、うん・・・あるかも・・・」

日が沈み、庭の落ち葉が、風にそいでざわめきはじめた。紗季の身体を冷気が包んだ。

「え・・・いつのこと?」

海斗が訊ねた。外が暗くなるにつれ、紗季の顔がガラスに反射して海斗からもかすかに認めることができた。紗季は物憂げな表情をしながらも綺麗な目をしていた。

「すごく・・・最近・・・」

「最近?」

ガラス越しに海斗と目が合った。だんだんはつきりと映ってくる海

斗の顔から、紗季は視線をそらした。怖くて、とても海斗のほうを向きなめることはできなかった。

紗季は、次第に声を震わせながら言った。

「大切な人が、どこかに・・・あの木立の中に消えてしまいそうで、不安で、怖かったの」

「大切な人・・・？」

「でも、その人はそんなの関係なさそうで、その人の気持ち、見えなくて・・・」

「・・・」

「淋しくて・・・」

「紗季・・・それって・・・」

「海斗くん・・・私、もう・・・」

「紗季・・・待って・・・」

紗季の身体の異変に気づき、海斗が慌てて呼びかけた。

「海斗くん、私、しちゃう・・・ごめんなさい・・・」

上気した息で曇りだした窓ガラスに映る海斗の視線が、一瞬だけおしりのほうに向けられるのを紗季は見逃さなかった。

紗季はそのまま黙って目を閉じ、自分の身体が望む声に身を任せた。身体じゅうの力が抜けていく・・・

《温かい・・・海斗くんもさつき、こんなふうに感じていたの?》

自分のなかにあふれるように広がっていく温かさ、遠い昔に感じたことのあるその感覚とともに、紗季の不安も、怖さも、淋しさも、すべて消えていった・・・

卒業旅行（エピソード）恋のプロローグ

「海斗くん、びっくりさせてごめんね」

海斗に身をゆだね、レースのチュニツクの裾から濡れたショーツと太腿を見せながらも、紗季は心から元気そうだった。

「まさか、紗季まで漏らしちゃうとはね・・・」

白いバスタオルの上で、紗季の太腿に張りついたジーンズを少しずつ脱がせながら海斗が言った。

「でも、海斗くん、私がしちゃうって、期待してたでしょ？ 私の
おしり見てたから」

「分かったの？・・・でも、まさか、ほんとに漏らすなんて」

「私だって、海斗くんがおもらしして、すごくびっくりしたんだから」

「そうだったね、ごめんなさい」

「でも、海斗くん、素敵だった」

「紗季だって、すごく素敵だよ」

ジーンズを紗季の両脚からはずした海斗は、一気に紗季のショーツを脱がせると、紗季がしてくれたのと同じようにタオルで丁寧に拭き、新しい紺色のショーツを穿かせてあげた。

窓辺で体育すわりをしながら、紗季が隣の海斗に言った。

「海斗くん、勝手におしっこ漏らして、勝手に私に甘えて、勝手に私を揺さぶっておいて・・・勝手に別れようとするなんて、ひどいって思った」

「それで、紗季もおもらししたの？」

「それもあるけど、気持ちが淋しかったりすると本当に出ちゃうんだね。私もまさか、この歳になって漏らすとはね・・・」

紗季が目を伏せ、紺のショーツをさすりながらつぶやいた。

「よかった・・・紗季がその気になってくれて」

「え、海斗くん・・・まさか、わざとおもらししたの？」

「紗季だって、わざとのくせに・・・」

「それじゃ、あんな冷たいこと言ったのも？」

「うん、紗季の気持ちを揺さぶってみたかったんだ。でも、紗季がおもらしするなんて思わなかったし」

「ひどい・・・でも、そこまでの海斗くん、すごいと思う」

「紗季にはかなわないよ。僕たち、似てるのかな？」

やがてすっかり日が暮れて、窓の外にはひとつ、ふたつと星が瞬きはじめた。

「なんだか・・・またおしっこしたくなってきちゃった。紗季は？」

「うん・・・さっき、コーヒー飲んだからね」

「しちやおうか？」

「うん・・・」

肩を抱きながらキスをするふたりを包みこむかのように、二つの紺色のショーツの下に、かすかな音を立てて綺麗な水が広がっていった。

（「卒業旅行」終わり）

卒業旅行（あとがき）

この作品では、おもしろした相手が急に大きく見えてくることへの葛藤を描いています。

子どもの頃、それまで気に留めていなかった異性が、おもしろしたことをきっかけに急に気になりだした記憶、きつとあると思います。その切なくなるような気持ちを表現したくて書いてみました。

冒頭、彼氏の海斗は、あとから考えればものすごい勇気をもって、おもしろしすることになります。もし、その出来事がなければふたりの仲はきつと終わっていたわけですから、その情景は丁寧に書きたいと思いました。

エピソードでの会話で、彼は最初にわざとおもしろしたことになると思います。車中で多めに水分を摂ったことは事実ですが、実は恋の先行きへの不安や彼女に冷たくされている淋しさといった感情が、我慢する気力を阻むほうに作用したことは間違いありません。わざとというより、おもしろしても仕方がないと思える状況をつくる、いわば「自分に対する未必の故意」の状態だったといえます。ですから、最初から計画的に仕組んだのではなく、そうする可能性も心のどこかに秘めつつ、車を降りたときの身体をとりまく状況から、やや偶発的かつ衝動的にしたというほうが正しいと思います。

その後、衝撃を受けた紗季の心が次第に乱されていく様子を表現していますが、漏らした海斗のほうは、どうだったのでしょうか。

彼にとっては、おもしろしが偶発的な要素もあったとすれば、最初は

その後のことをあまり考えられない状態だったと思います。きっと彼は過去にもおもしろした経験があるはずで、そのときの心情もふと蘇ってきたことでしょう。すぐに彼女が親身に着替えの世話をしてくれたことで、その彼女に甘えたり、優しくされたいという気持ちが芽生えたはずです。

やがて、自分のしたことの大きさと、彼女に服を脱がされ、裸も見られていくことで、彼氏として猛烈な恥ずかしさが襲ってきます。しかし、それと引き換えに、おもしろという性的にも恥ずかしいことをした自分を彼女にすっかり受け止めてもらえたことで、彼女の愛を確かめることができた実感します。そして、着替えさせてくれた彼女の手つきや表情から、彼は猛烈な恥ずかしさの中にも、おもしろしたことと彼女を衝撃的に魅了できたことを察し、その後コテージでひとりになって落ち着いたとき、不思議な感動に似た気持ちを覚えたに違いありません。この時点で彼が完全に優位に立ち、彼はうれしくて明るく振舞うようになります。

その後の彼女は、いわば彼に振り回される立場になります。彼女にすれば、彼から受けたセックスアピールや、ものおじしない彼の健気さから、彼が大きく、あるいは放っておけない、特別な存在に見えてきます。しかも別れまではめかされることで、心に穴が空くほどの不安や淋しさに襲われます。その気持ちが、彼女におしっこを我慢することを難しくさせます。

しかし、いまの自分の気持ちは、さっき彼がおもしろしたときと同じ思いであることに気がつきます。彼に自分の心情を吐露するにつれて、彼女はじめて彼に甘えようとする気持ちも芽生えてきます。不安や淋しさ、怖さ、甘え、それらの感情によりどんどんおしっこが我慢ができなくなっていく状態の中で、彼女は自分もおもしろ

れば、それらの気持ちを解決できることを知り、それを選択します。

これも彼からみれば「わざと」かもしれませんが、彼女にしてみれば、それらの感情がかなり作用して、いわば「失禁」に近い状態だったといえます。彼女が「この歳になつて・・・」と自分のショーツをさすところに、それが表れています。

こうして、おもらしという恥ずかしい出来事を通して心の奥底を見せあえたふたりは、固い絆で結ばれることになります。

実際には、彼氏や彼女の前でおもらしするには、かなりの勇気が必要ですので、晩秋の肌寒い環境と高原リゾートという非日常空間をバックに描きました。おもらした後の相手も、紗季のように献身的になってくれればいいのですが、恥ずかしさや衣服の犠牲などを考えるとハイリスクな冒険ともいえます。ですが、あってもおかしくない、あつたとしたら心温まる物語「ファンタジー」だと思います。

（「あとがき」終わり）

白い洗面器（総括）

彼との初めての旅行でホテルに泊まった翌朝、食べ過ぎたことが原因で翔人の前で吐いてしまい、そのときの腹圧でベッドの上で失禁してしまう麻衣。

翔人に呆れられてしまうという心配をよそに、献身的に麻衣の介抱をし、着替えや洗濯などをしてくれる翔人を見て、麻衣は母親に守られているような優しい気持ちに包まれる。

そして彼に服を脱がされた場面と、幼い頃おもらしたときの暖かな思い出とを、まどろみの中で重ね合わせた麻衣は、翔人という恋人の存在の前で、自分が今まで心にしまいこんでいたある気持ちに満たされる。

それは、大人になるにつれ、社会性を身につけた自分がずっと押さえこんできた、か弱く、幼い自分に憧れる気持ちだった。

まどろみから覚め、彼女の身体をやさしく気遣う翔人の言葉に、麻衣は・・・

白い洗面器（潜在意識）

おもらしという出来事は、子どもの頃はとても身近にあった出来事でした。

しかし、漏らしてしまう原因には、単におしっこを我慢できなかったからという理由以外に、様々な理由があったのではないのでしょうか。

たとえば不安、哀しさ、淋しさ、怖さなどは我慢する気力を殺いでしまいます。そこにちよつとした甘えや依存心などがあれば、「わざと」漏らしてしまいたい衝動に駆られることもあったと思います。それは幼い自分、か弱い自分の象徴ともいえます。

しかし漏らしてしまうことへの恥ずかしさ、大人の自分、強い自分、社会性のある自分がそれを否定し、やがて人は大人になっていきます。

でも、幼い自分、か弱い自分への憧憬、郷愁といった潜在意識は、誰しも心のどこかに残っているのではないのでしょうか。

人は恋をすると、いくつになっても子どものように振舞うことがあります。恋をしたとき、何かをきっかけに、その気持ちを肯定することがあったとしたら・・・

そんな物語をつくってみました。

白い洗面器（はやく吐きたい・・・）

「だめ・・・」

「だめ？」

「うん・・・せんめんき・・・」

ベッドに横向きに寝ていた麻衣が、思い切ったように、翔人に言った。

翔人は急いでバスルームから白い洗面器を取つてくると、麻衣の顔の横へ差し出した。

ホテルの朝食バイキングを食べ終わった麻衣が、部屋に戻る途中のエレベーターの中で軽い吐き気を催したのは30分ほど前だった。美味しさに乗じて、普段朝から食べ慣れない食材をたくさん食べてしまったのと、夕べのお酒が残っていたせいもあるのかもしれない・

麻衣はそう思い、自分の行動を後悔していた。

翔人とは、初めての旅行だった。恥ずかしい、みつともないところは見せたくない、早く快復したい、その麻衣の願いは時間が経つに

つれ、叶わないように思えてきた。

《吐きたくない・・・》

そう思っていた麻衣だったが、ある瞬間を過ぎたときから、動悸に見舞われはじめた。気持ち悪さが一線を通り越して、身体が吐くことを予感したからだった。そして、吐きたくないという彼女の気持ち、いつしか

《はやく、吐きたい・・・》

という気持ちに変わっていた。

時おり、喉の奥がひくつと動くのを感じはじめたとき、麻衣は覚悟を決め、ためらったあげく翔人に言った。

麻衣は、翔人の持つてきてくれた洗面器の上に、うつぶせになって顔を出した。綺麗な白い洗面器の底にある使い込んだ無数の小傷が、間近に見えた。もうすぐそれが自分のたくさんの吐瀉物で隠れてしまふことを、麻衣は予感した。

何も言わないのに、すぐに翔人の手が自分の背中を力強くさすのを感じた。すると、今までのものすごい気持ち悪さが嘘のように引

いていった。それと同時に、身体から何かがこみあげてくる、猛烈な感覚が高まっていった。麻衣は自然に口をあけた。

「げえっ、ええええ・・・」

普段の自分の声とは全く違う、聞きなれない太い声とともに、洗面器の中にご飯粒の混じった透明な液体が静かな音を立ててたくさん流れていった。麻衣はおなかの筋肉が痛いほど激しく収縮するのを感じていた。

翔人はずっと麻衣の背中をさすり続けた。

「吐いちゃって・・・ごめんね・・・」

翔人に背中をさすられながら、麻衣は上擦った声で言った。

翔人の前で、やっぱり吐いてしまった自分を恨めしく思いながら、麻衣の身体は吐いた直後の、やるせないような気持ちよさに包まれていた。

翔人の手がまだ背中を上下するのにあわせて、自分の首が揺れているのを感じながら、麻衣は自分が吐いたもので満たされた洗面器の奥のほうをしばらく見つめていた。

《たぶん、もう吐かないかな・・・》

と麻衣が思った頃、

「いいんだよ、麻衣、思いっきり吐いちゃって」

ふとかけられた翔人のやさしい言葉が、麻衣の身体をふたたび刺激した。それは”もう吐かない”という彼女の希望を裏切らせるように、さっきまでの「やるせない気持ちよさ」を少しでも悪いほうに変えた。そして、背中をさする翔人の手がいつそう速く、そして力強くなつたそのとき、

「げ……え……ええええ」

身体全体が痙攣するかのような力が入り、麻衣はふたたび吐いた。麻衣の身体を気持ち悪くしていた残りの吐瀉物が、たくさん洗面器の中にあふれていった。

やがて麻衣の嘔吐が完全に止まったのを確認すると、翔人は少しずつその手を止めた。

白い洗面器（陽だまりの気持ち）

恥ずかしいのに、気持ちいい脱力感を麻衣は感じていた。背中に翔人の手の暖かみが残っていた。

吐いたときの動悸や、やるせない気持ちが落ち着き、ふたたび横になろうと体勢を変えようとしたとき、麻衣は普段とは違う下腹部のあたりの感触に気づいた。それは昔感じたことがあるような感触でもあった。

麻衣は、ふたたび動悸に襲われた。でも、すぐに立ち上がってどうにかするほどの体力はまだ快復していなかった。

翔人が、洗面器の中味をトイレに流し、バスルームで洗って戻ってくると、麻衣の様子が少し変だった。翔人は、麻衣のベッドに腰掛け、彼女に話しかけた。

「麻衣、どう、すっきりした？」

麻衣は、さっきと同じうつぶせのまま、自分の腕の上に載せた顔を少しだけ翔人のほうに向けていた。そこには気持ち悪さとは違う、困った表情を読み取ることができた。翔人はふたたび訊ねた。

「麻衣、どうかしたの？」

麻衣は、哀しそうな目をしながら、少しためらったあと、小さな声でささやいた。

「ねえ、翔人、笑わないで聞いてくれる？」

「うん、何？」

「さっき吐いたときに・・・ね・・・、おしっこしちゃったの」

「え・・・？　ちよつと、いい？」

翔人はそう言つて、そつと麻衣の掛け布団を剥いでみた。彼女の下腹部のまわりのシーツは、あまり変わった様子はないように見えた。翔人が麻衣の身体を横向きに抱き起こすと、彼女の薄手の白いサブリナパンツが、下腹部のあたりを中心にひざの上まで濡れていて、シーツにも濡れたあとが広がっていた。

「身体に力が入ったときに・・・いっしょに、おしっこしちゃったみたい」

麻衣は子どものおどおどと言いつつ、翔人に呆れられることを覚悟していた。でも翔人は違った。

「吐いたときの腹圧で、出ちゃうんだよね。分かるよ、そういうの。とにかく着替えようか」

翔人はやさしくそう言うと、バスルームへタオル類を取りに立った。部屋を出る前に、彼はもう一度麻衣のほうを振り返って、

「誰にでもあることだから、気にしないでね」

と声をかけた。

麻衣ははにかんで微笑んだ。

うつぶせの身体を横にして、おもむろに起きあがろうとするとき、麻衣は下腹部に濡れた衣服の温かい衣擦れを感じた。

それは遠い昔に感じたことのある感覚だということを身体が覚えていて、麻衣は静かな気持ちになった。暖かな陽の差すベッドの端に腰掛けると、麻衣は自分でパンツのホックを外しはじめた。

前面がぐつしより濡れたパンツは、座ったままではホックもファスナーも外しづらそうだった。ちょうどタオルをたくさん持って戻ってきた翔人はそれを見て、

「麻衣、ちよつとだけ立てる？」

と言って、麻衣をやさしく抱きかかえるようにして立たせた。そして、そのまま彼女のパンツのファスナーを下ろして脱がせはじめた。

麻衣は、翔人に身をゆだねた。吐いたあとで力が入らないことも確かだったが、それだけの理由ではなかった。自分のサブリナパンツ

が足もとまで下げられ、翔人に自分の太腿をさらすことも、不思議と抵抗はなかった。

「いい？」

と一言だけ断って、翔人は彼女のショーツを脱がせた。それを足もとまで下ろすと、さっき下げたパンツといっしょにして、彼女の脚を片方ずつ持ち上げるようにしてくるぶしから外した。そして彼女が恥ずかしがらないよう、間をおかずにタオルで彼女の下腹部や太腿などを丁寧拭いた。

翔人は、麻衣のサブリーナパンツを広げてみると、

「これなら薄いし、洗って2、3時間もあれば乾くよ」

と言って、ショーツといっしょにバスルームに持っていった。

翔人は、バスタブに洗濯物を入れ、少しお湯を満たすと、ボディソープを数滴入れ、足踏み洗いた。そして新しいお湯ですすぎ、それらを手でしぼったあと、ホテルの係に余分に持ってきてもらったバスタオルにくるみ、そこに自分のおしりをのせるようにして体重をかけ、水気を取った。

新しいショーツを穿いた麻衣は、翔人のベッドに移り、翔人の布団をかぶりながら、てきぱきとこなす彼の後姿を目で追いかけていた。

麻衣は、次第に気持ちが落ち着いてきた。そしてさっきまでの出来事を思い返してみた。翔人に背中をさすってもらい、彼の前で吐き、そしておしっこを漏らした。でも、彼は吐いたものを処理し、やさしく脱がせてくれて、濡れたところを拭いてくれて、洗濯までしてもらった。

麻衣は陽だまりに包み込まれるような優しい気持ちを感じていた。

《翔人、まるでお母さんみたい》

そんな思いとともに、翔人の匂いのするベッドの上で、麻衣はまどろんだ。さっきまでの様子が、小学生のときの記憶と重なり、麻衣の脳裏によみがえってきた。

白い洗面器（最初で最後の思い出）

麻衣は近くの公園でかくれんぼに夢中になっていた。最後にかくれていたときに、初めて自分の尿意が高まっているのに気がついた。夕暮れが迫り、麻衣のしゃがんでいた低木の陰は日が当たらず、寒気が麻衣の身体を包んだ。また、鬼役の男の子がなかなか探しにこないことで、心細さも感じていた。

その男の子は、麻衣よりも2学年上の上級生で、やさしく落ち着いていて、麻衣は彼のことを信頼していた。そして早く見つけに来てもらいたい、そう願っていた。

しかし、その男の子はなかなか来てくれなかった。遠くのあちこちで、見つけられた歓声が響く中、麻衣は自分が取り残されるような淋しさを感じていた。

そうした感情と、寒さ、そして時間が、麻衣の尿意を高めていた。

「麻衣ちゃん、みーつけ」

やっと見つけに来てくれた彼を見た瞬間、麻衣の心に衝動的に、彼を困らせようという思いがよぎった。この人ならきつと自分を守ってくれると直感したからだ。なかなか自分のところに来てくれなかった抗議の意味も含めて、彼に甘えた。

「麻衣ちゃん・・・どうしたの？」

麻衣の様子がおかしいのを心配した彼の言葉を聞いたとき、麻衣は思わず、自分のパンツの中に熱いものがあふれだすを感じた。それはすぐにおしりへ広がったあと、かすかな音を立てて草の上に滴り落ちていった。

麻衣は、自分がわざとしたことなのに、男の子の前でパンツを濡らしたことが急に恥ずかしくなり、その場で泣き出した。そしておしっこを途中で止めてしまった。

「麻衣ちゃん、ごめんね、見つけに来るのが遅くなって・・・」

一方、彼は、純粹に麻衣がおしっこを我慢できずに漏らしてしまい、それが悲しくて泣いていると理解した。そして、なかなか見つけに来なかった自分にも責任の一端を感じていた。

それでも、麻衣がまだおしっこを出しきっていないと悟った彼は、小声でやさしく麻衣にささやいた。

「いいんだよ、麻衣ちゃん、思いっきり漏らしちゃって。お兄ちゃんが何とかしてあげる」

信頼できる彼の言葉に、麻衣の身体が反応した。麻衣は顔を覆って泣きながらも、心を解き放つようにおしっこをあふれさせた。冷たくなりかけたパンツにふたたび熱いものが広がり、地面にあふれ落ちていくのを、麻衣も彼も感じていた。

その後、麻衣は彼に連れられるまま家路についた。かくれんぼはそれで終わりとなった。彼はみんなに、

「麻衣ちゃん、具合わるいみたいだから、送ってく」

と言つて、麻衣に気を遣つてくれた。

そのことがうれしくて麻衣はまた泣いた。歩きながら、パンツから冷たいしずくが時おり太腿へ伝うのを感じながらも、麻衣は暖かい気持ちになった。

家で彼が訳を話してくれたおかげで、麻衣は母親からも叱られることがなかった。麻衣は暖かい部屋の中で服を脱がせてもらい、濡れたところを拭いてもらった。

麻衣にとってはそれ以後二度とできない、最初で最後の「わざと」おもらした暖かな思い出だった。それは大人になるにつれ、社会性を身につけた強がる自分が、知らず知らずのうちに心の奥にしまいこんできた。

でも今日、思いがけず翔人の前で吐き、そしておもらしてしまった自分は、あのときと同じ、か弱く、幼い自分のように麻衣は思った。

そして、翔人という恋人の前で、そういう自分でいられることがうれしい・・・そんなふうに感じていた。それは麻衣自身が大人になって初めて感じた気持ちだった。

白い洗面器（もう一度だけ・・・）

そついう弱い自分を、彼が好きになってくれるだろうか・・・麻衣には不安もあった。でも、今の自分の思いは止めることができなかった。

「外に干してたら、もうすっかり乾いたよ。ほら」

翔人の言葉に、麻衣はまどろみから覚めた。

麻衣が翔人から受け取ったサブリナパンツは、ほのかに石鹸の香りがした。それはしなやかに、丸くて可愛い麻衣のおしりを包んだ。

「翔人、ほんとにありがと。もう大丈夫だから、いまコーヒーを入れるね」

キッチンに立った麻衣は、カップにドリップコーヒーをセットし、ポットのお湯を注いだ。透明なお湯が注がれ、湯気が立ち上る様子に、麻衣は自分がおしっこを漏らしてしまったときの温かい感触を重ね合わせた。

麻衣は、思い出を懐かしむまどろみの中にいる間から、あの頃の幼い自分と、さっきのか弱い自分を重ね合わせ、無意識に尿意を我慢し続けていた。そして、ポットの透明なお湯が注がれるのを見て、

麻衣は心を決めた。さっきの翔人のやさしさを、もう一度受けてみたいと思った。

いま穿いたばかりの乾いたサブリナパンツが、歩きたびにしなやかに衣擦れして、不思議に麻衣の下腹部のあたりをくすぐるような気がした。2つのカップを両手に持ちながら、麻衣はぎこちない足取りでゆっくりと歩くと、内股にそつと腰をかがめるようにしてそれらを彼のいる窓辺のテーブルに置いた。

翔人はその様子を見て麻衣に問いかけた。

「麻衣、ほんとにもう大丈夫なの？ まだ気持ち悪そうだけど・・・」

「

麻衣の身体をやさしく気遣ってくれる翔人の言葉に、麻衣は思わず身体ごと甘えずにはいられなかった。そこには、幼い頃かくれんぼで見つけてくれた男の子に甘えようとする自分がいた。

「・・・きもち、わるい」

麻衣はコーヒーを置いた手でそのまま口元をふさぎ、吐きそうなそぶりをしながらつぶやいた。

翔人はおもむろにその場から立ち上がると、近くに置いてあった白い洗面器を取り、彼女の口元にそっと差し出した。そして、ふたたび彼女の背中をさすりはじめた。

そのままトイレに連れて行こうとすればできるのに、あえてそうせず、翔人がその場で背中をさすってくれたことが、麻衣はうれしかった。

《すごく気持ちいい……。いつもこうして翔人に甘えていい？》

翔人の手が速く、そして力強く、麻衣の背中をさすった。そして、

「げっ……。ええ……」

麻衣は洗面器の上で口を開け、おなかの力を振り絞るようにして、吐こうとした。

「いいんだよ、麻衣、思いっきり吐いちゃって……」

「うん……。げっ……。えええ……」

何度えすいても、麻衣の胃の中のもの洗面器に出ることはなかった。

でもその代わり、自分の下腹部に温かいものがあふれ、それがおしりから太腿、ふくらはぎへと流れていくのを、麻衣は感じていた。

（「白い洗面器」終わり）

レンガの小径（総括）

クラスメイトの男子の失敗を目のあたりにしたことで、急に彼への恋心が芽生える一方、次々と湧き上がってくる解決できない思いに悩む彼女の気持ちを描いた恋愛ファンタジー。

高校1年の課外学習の終了式でももらししてしまい、倒れそうになりながらレンガの道を連れていかれるクラスメイトの遼希。

そのとき自分もおしっこをしたかった沙緒理。しかし彼が失敗してくれたことで解散になり、自分はおもらしすることを免れる。

遼希の失敗に衝撃を受ける沙緒理は、その後の遼希の行動や、遼希の気持ちをひたすら思いめぐらす。彼のことをか弱く、それでいて可愛らしく思う沙緒理。

それまでほとんど気にしていなかった遼希の存在が、彼に会えないうちに、沙緒理の心の中でどんどん大きくなっていく。しかし、いくらそう思っても届かない切なさがこみ上げてくる。

彼の家のあるレンガの小径に立つが、彼はいない。傷ついた彼がこのまま遠くに行ってしまうのではない、沙緒理は途方にくれる。

その帰り道、沙緒理が学校の運動場に来たとき急に目の前の景色が変わり、あのにタイムスリップする・・・

レンガの小径（共感）

苦しい思いをしたボーイフレンドがいても、そばにいてあげられない・・・

なぜなら、その人と親しい関係というわけじゃないので、それはきつと無理・・・

でも、離れている間に、彼を思う気持ちが募っていく・・・

でも、どんなに思っても、それを彼に伝えることができない・・・

なぜなら、その人は失敗をしたのに、自分は失敗したことがない、そういう自分がいくら彼を思いやったとしても、その人の心に届くはずかない・・・

方法はただひとつ、もしも時間が戻せたら・・・

レンガの小径（予期せぬ衝撃）

「起立」

先生の号令で全員が立ち上がった。礼をしたあと、前のほうで列が乱れた。遼希のまわりに人が集まりだし、声をかけているのが分かった。

《遼希・・・、えっ、遼希がまさか・・・》

女子の列の、彼より5人ほど後ろに並んでいた沙緒理からも、彼の明るいデニムのジーンズに水が流れたような筋がいくつもついていて、足もとの地面にも水をこぼしたような黒いしみができているのが見えた。

モデルのようなスタイルで、細いジーンズにショートジャケットを着こなしていた遼希は、すぐに何人かの人に取り囲まれてしまった。それらの人の隙間から、時おり身体だけ見える彼の後姿は、まるで女の子に見間違えてしまうようだった。

「遼希、おしっこ漏らしちゃったんだ・・・」

遼希は、おもらししたショックから気を失いそうになり、駆け寄っ

た担任の女性教師の肩に倒れかかった。しかし、すぐ気を取り戻し、彼女に連れられて保健室へと続くレンガの道を登っていった。女性教師は歩きながら自分のジャケットを脱ぐと、遼希の丸くてかわいらしいおしりに巻いて、それを覆い隠した。

その後予定していた「休み中の注意事項」の連絡は中止となり、その場は解散となった。

沙緒理も終了式の間、ずっとおしっこを我慢していた。式の途中、立ち上がって気をつけの姿勢をとるたびに、まもなく終わるという期待と姿勢の変化がもたらす激しい尿意が重なって、思わず失禁してしまいそんな感覚に襲われていた。

そして連休前のこの季節にしては、寒い日だった。もし、あと5分トイレに行けなかったら、きっと自分も遼希と同じように漏らしてしまったかもしれない。沙緒理は、遼希が失敗したおかげで、自分が難を逃れたことを悟った。

トイレから出た後、沙緒理はレンガの道の先の、遼希のいる保健室のほうを見遣った。

「沙緒理、いっしょに帰ろ」

「うん」

同じクラスの女友達に誘われるまま、沙緒理は遼希が気になりながらもそれをおくびにも出すことができず、いつもと変わらない表情を装いながら、後ろ髪引かれる思いで学校をあとにした。

レンガの小径（届かない思い）

家に帰ってから、沙緒理の気持ちはどんどん高ぶっていた。遼希がジーンズを濡らした後姿と、女性教師の肩に倒れこむ姿が頭から離れなかった。

沙緒理はその夜、遼希が先生のジャケットを腰に巻いて連れて行かれ、姿が見えなくなったあとの、ありとあらゆる可能性を想像しては、その後の遼希のことを思いめぐらせた。

遼希は途中で倒れずに保健室に行けただろうか・・・

途中で泣いたりしなかっただろうか・・・

先生はどんな言葉をかけたのだろうか・・・

具合が悪そうだったから保健室で寝ていたのだろうか・・・
替えのパンツやジーンズはどうしたのだろうか・・・

先生はどこまで遼希に付き添っていたのだろうか・・・
具合が悪かったのなら、先生が遼希のジーンズを脱がせたりしたのだろうか・・・

遼希のパンツはどんなふうに濡れていたのだろうか・・・
先生は遼希の裸を見たのだろうか・・・

おしっこは、全部出きっていたのだろうか・・・
まだ実はしたかったのではないだろうか・・・

遼希と沙緒理は、本人たちはあまり自覚していなかったが、根も葉もないうわさを周囲の女子が立てるほど、まわりから見れば似合いの二人だった。しかし、沙緒理はまだ遼希のことをさほど気にする存在というわけではなかった。二人で話すことはあったが、ときめいたり恥ずかしかったりすることはなく、ごく普通の気持ちで接することのできる相手だった。ましてや、遼希が沙緒理に対してどう思っているかなど、考えたこともなかった。

したがって、学校で会って話す以外には、彼の携帯の番号も知らなければ、家に電話をかけたこともなかった。

ただ、以前家庭訪問で先生を送っていったことがあり、家の場所は知っていた。学校と同じように木立に囲まれたレンガの道の先に彼の家はあった。そこへ行くと、不思議とほっとした気持ちになれたのを思い出した。

次の日から連休となり、学校は長い休みに入った。遼希のことが気になって仕方がない沙緒理は、ブラウスの上にあのとき遼希が着ていたのと同じようなショートのジャケットを羽織り、細身のジーンズを穿いて過ごした。遼希に会えない代わりに、せめて少しでも遼希に近づきたい、そんな気持ちが彼女にそうさせた。

《あのときの遼希はどんなふうに感じていたのだろう・・・》

一晚経った沙緒理の心は、そのことを真剣に考えはじめていた。

終了式の体育すわりのとき、自分もおしっこを我慢していて苦しかった。遼希はそれ以上に我慢していたのだろうか・・・

それは、どんな苦しさだったのだろうか・・・

それとも寒さのせいや、体調が悪くなったせいで、急にしなくなってしまったのだろうか・・・

そして立ち上がったとき、姿勢が変わったことで我慢ができなくなっただろうか・・・

みんなに見られながら、あのレンガの道を歩くのって、どんな気持ちなのだろうか・・・

恥ずかしかっただろうか・・・

傷ついたりだろうか・・・

保健室では裸にされたのだろうか・・・

どんな手当てをしてもらったのだろうか・・・

先生にどんな言葉をかけてもらったのだろうか・・・

先生たちの思いやりで、遼希は少しでも暖かい気持ちになれただろうか・・・

それはどんな気持ちなのだろうか・・・

温かかっただろうか・・・

おしっこを漏らしてしまう瞬間って、どんな感じなのだろうか・・・

パンツを穿いたままおしっこがあふれると、どんな感じがするのだろうか・・・

そして、脚の内側や靴の中は・・・

いつまで温かいのだろうか・・・

すぐに冷たくなるのだろうか・・・

そのまま歩くときはどんな感じがするのだろうか・・・

沙緒理は、幼稚園のとき以来いままで、家庭や集団生活の中を含めておもらしをした記憶が一度もなかった。漏らしてしまいそうに思うことは幾度となくあったが、それらは幸いなことにすべて切り抜かれた。これまで、本当に運が良かったと沙緒理自身も思っていた。

しかし、刻々と、遼希のことが気にかかりだす沙緒理にとって、おしっこを漏らした遼希の気持ちが分からない自分が齒がゆく、もどかしく、そして悔しい気持ちさえ感じていた。沙緒理は幸運な自分の生い立ちを初めて恨んだ。

おもらししてしまった遼希が、なにか自分には想像のつかない、とても大きな未知の体験をしたように感じて、自分がそれに追いつけないことが哀しく、そして切なかった。中学校でも、小学校でも、あるいは幼稚園でもいい、そういう記憶があれば、少なくとも彼に近づき、彼の気持ちを思いやることができるのに、と思った。

彼と同じ服を着て、姿見に自分の姿を映した沙緒理は、そこでおしっこをすごく我慢している状態を想像し、膀胱の筋肉を引き締めたあと、そつと緩めてみた。鏡に映る自分の姿が、あの日の遼希と重なり、彼が、そして自分が、か弱く、そして可愛らしく感じた。

しかしいくらそう思ってみても、彼にその気持ちが届かない切なさだけが残った。

レンガの小径（教えて・・・）

以前まで、ほとんど気にしていなかった遼希の存在が、あの事件以来、遼希に会えない間に沙緒理の心の中でどんどん大きくなっていった。

でも彼に会ったとしても、何て言えいいのか・・・

おもらしなんて、彼だって触れてほしくないことのはずなのに、そんなことを持ち出して彼を傷つけるわけにはいかない。

この気持ち、結局伝えられなくて、彼にわかってもらう術もなく、彼に近づけないまま終わってしまう・・・

このまま時が経って、何もなかったように普段どおりの毎日に戻るなんて、嫌・・・

・
沙緒理の心に、自分だけが取り残されていく淋しさがこみ上げてきた。自分だって、あのとき漏れそうになるほどおしっこを我慢していた。なのにどうして彼だけにおもらしさせてしまったのだろっ・・・

《あのとき自分も漏らせばよかった・・・》

そうすれば、自分だけが遼希の気持ちを追体験して、まわりの女の

子たちを差し置いて彼に追いつけるのに・・・

沙緒理はそう感じはじめていた。

沙緒理はいてもたってもいられず、家を出た。燃えるような緑の並木道を通りすぎ、彼の家のあるレンガの小径をめざした。自分の気持ちこそ正直に伝えたい沙緒理だった。しかし、どう話していいのかわからなかった。

通りのはずれの、周囲を山の緑に囲まれた彼の家は、カーテンが閉められひっそりとしていた。ためらった拳句、沙緒理は呼び鈴を押したが、誰もいなかった。

あのとき傷ついた彼が、このままこの街を離れ、遠くに行きたきりになってしまふのでは・・・そんな思いが沙緒理の脳裏をよぎった。

沙緒理は途方に暮れながらレンガの道を戻り、緩い坂道を下って、いつしか学校のグラウンドまでたどりついていた。昨日とは違って変わって誰もいない運動場の、自分がすわっていたあたりにしゃがみこむと、沙緒理はひざを抱え、顔をうつむかせて泣いた。

いつしかまどろんでいた沙緒理の耳に、遼希の声が聞こえてきた。街のざわめきが、急に静かになった。

《沙緒理、どうしてそこにいるの？》

《遼希・・・、ずっと遼希のこと考えてた》

《いいんだよ、同情なんかしてくれなくても》

《同情なんかじゃないの・・・そういうことじゃなくて》

《どういうこと？》

《遼希のこと、思ってたら、すごく切なくて・・・》

《沙緒理・・・どうしたの？》

《うまく言えないけど・・・遼希のことが、気になって》

《だって、僕はあんな恥ずかしい失敗をしちゃったんだよ》

《私も、あのときすごくおしっこを我慢してたの・・・》

《沙緒理も・・・？》

《遼希が漏らしてくれなかったら、あのあと私もきつと漏らしちゃったと思う・・・》

《そうだったんだ・・・でも、恥ずかしい思いをするのは僕だけで十分だよ》

《でも・・・それじゃ、私の気持ちが伝わらない》

《どういうこと・・・？》

《遼希がどういふうに感じたのか・・・知りたいの》

《沙緒理、もうすぐ時が戻るよ》

《えっ？》

《あのときに時を戻すから、そしたら、それから先は沙緒理が決めればいい・・・》

《でも・・・私、怖い。いままで一度もおもらしたことはないし》

《沙緒理って、優等生なんだね》

《そんな・・・ずっと運が良かっただけ。でも、いまそのことが切ないの。遼希が私の知らない世界に行っちゃいそうで・・・遼希が感じた気持ちが分からなくて》

《おもらし・・・しちゃったけど、いま思うとそんなに悪いものじゃないんだね。もちろんすごく恥ずかしかったけど・・・、みんなに注目されるし、先生には優しくしてもらえるし、沙緒理みたいに心の中で告白してくれる女の子もいるし》

《告白・・・だなんて》

《ひとりだったから、この気持ち誰にも分かってもらえなくて・・・ちよつと淋しかったんだ。でも、もし沙緒理がいっしょだったら、きつと素敵だと思うよ》

《遼希くん・・・》

《大丈夫だよ。僕のことしっかり見てて。もうその時間だよ》

沙緒理のまわりから霞がとれるように、徐々に視界が鮮明になってきた。みんなが体育すわりをしている、あのときの風景だった。

そしてあのときと同じように、沙緒理の尿意も急激に高まってきた。

「起立」

みんなが立ち上がるのと同時に、隣の列の5人ほど前にいる遼希が立ち上がって、しなやかなおしりについた砂を両手で2、3度払っていた。その手がふと止まり、苦しそうにちよつと前かがみになった次の瞬間、彼の太腿からふくらはぎに向かってふわつと浮き上がるように、あちこちに水の流れが広がっていった。

遼希のまわりに人だかりができはじめた。沙緒理はそれを確かめると、身体がそれに促されるようにすつと膀胱の力が抜けていった。ためらいなく熱いものが下腹部にあふれ、ジーンズの内側の両脚を伝って流れていくのを感じた。

そして、長い一呼吸のあと、沙緒理のまわりにも人が駆け寄ってきた。

レンガの小径（エピローグ／恋のプロローグ）

沙緒理は遼希と並んでゆつくりと保健室へと向かった。濡れたジーンズが脚に貼りつき、靴からも”ぎゅ、ぎゅ”と水があふれる音がした。ふたりともとても歩きにくかったが、その足取りはむしろ軽やかだった。

「ごめんね、僕が漏らしたせいで、沙緒理まで漏らしちゃったのかな・・・？」

「ううん、遼希のせいじゃないよ。だって、私も我慢できなかったんだもん・・・」

「そうだよ、先生の話、長すぎるんだよね」

「ほんと・・・。でも・・・おしっこ漏らしちゃって、すっきりした」

「すっきりした？ うん、たしかに・・・、あはは・・・沙緒理って、面白いね」

「あはは・・・、遼希がいるから・・・遼希がいっしょでよかった」

「僕も・・・沙緒理がいてくれなかったら、どうなってたか・・・お礼を言うのも変だけど、沙緒理、ありがと」

「そんな、おもらししちゃった人に、お礼だなんて・・・何言って

るの？」

「ああ、ごめんね」

「でもなんか、私たち注目されているみたい」

「背中に視線を感じるよね」

「うん・・・恥ずかしい・・・」

「沙緒理、やっぱり恥ずかしい？」

「ううん、ちょっと恥ずかしいけど・・・、でもなんだか不思議な気分」

「そうだね・・・不思議な感じがする。僕と沙緒理はきっと噂されてるね」

「うん・・・」

みんなの視界から外れたのち、ふと風がやみ、輝きを増す若葉の緑にしっかり守られたレンガの小径を、手をつないで歩くふたりがいた。

（「レンガの小径」終わり）

夏のいたずら（総括）

おなかを壊しやすい自分のことを、なぜかカケルには自然に話すことができるなぎさ。

なぎさは、そうして話を聞いてもらううちに、彼の前では弱く幼い自分でいられ、陽だまりに包まれるような気持ちを感じることに、そして漏らしてしまいそんな自分の体験を彼に話すことで、彼の興味をそそることに気づきはじめる。

しかしなかなか進展しないカケルとの仲。なぎさのわだかまりが高じたとき、なぎさはみんなの前で激しい下痢を催してしまうことに。そこにトイレはなく、このままでは失禁おもらししてしまう絶体絶命のなぎさ。

しかし、そうなってしまったことを、なぎさ自身は予感していた。

切迫した状況になって、はじめて自分たちがどうしたかったのか知ったふたりは、心が通じあう。そして・・・

夏のいたずら（なぎさの気持ち）

初夏、それは運命のような出逢いだった。

「今日はおながが張るの」

「ちょっと下痢しちゃって」

カケルに出逢って間もない頃から、なぎさはカケルに親しみを覚えた。そしてカケルの前では自分の体調のことを話しだし、カケルに聞いてもらうことが多かった。

なぎさにとって、おなかを壊しやすいというのは自分の悩みの一つでもあった。通学経路の駅にあるトイレの場所はほぼチェックしていたし、現に今までも何度か漏らしそうになる場面もあった。

しかし、そういう自分の身体のことをカケルにはなぜか、明るく話すことができた。

普通だったら男子の前で話すことが憚られることもカケルに話せたのは、カケルのことを異性として意識していなかったからではなく、自分のありのままを、カケルに自然に受け止めてもらえそうな気がしていたからだだった。

「それはつらそうだね、大丈夫？」

「あ、分かる、そういうの」

カケルのほうも、健康的で気品の漂うなぎさの言うことに、少しも汚さを感じなかった。そして、なぎさをからかったり、蔑んだりすることなく、控えめでいて適度になぎさの体験を引き出すような聞き方をしていた。だから、なぎさは全くカケルを警戒していなかった。

「カケルくん、おはよう」

ある日のこと、カケルを見つけたなぎさは、ちょっと苦しそうにおなかをさすりながら、カケルに目配せした。

「なぎさ、どうしたの？」

カケルがなぎさに声をかけた。

「部屋のトイレが故障しちゃって」

「え？　じゃ、トイレはどうしてるの？」

「おしっこは・・・お風呂場でしてるんだけど、うんちは学校まで我慢してるの」

「えゝ？　それも大変だね」

「そしたら便秘がちになっちゃって」

「そうだよ、分かる気がする」

「それで、便秘薬飲んだんだけど・・・」

「うん」

「昨日の晩に飲んだら、朝、すごくしなくなっちゃって」

「え？　それでどうしたの？」

「急いで電車に乗って、一生懸命我慢して、やっと学校に着いたんだけど・・・」

そう話しているうちに、急になぎさの表情がいつもと違ってきているのにカケルは気づいた。そして、いつもだったらこれ以上訊かないことをあえて沙織に訊いた。

「・・・それで、間に合ったの？」

カケルが固唾を飲んで訊いた。

「・・・」

なぎさは言葉に詰まった。本当はトイレの個室に駆け込んだあと、脱いだジャケットとバッグの置き場に迷ううちに、油断してジーンズを脱ぐのが遅れ、少しでもだけショーツを汚してしまった。漏らしてしまったのは初めてだったが、わずかだったので特に気持ちは凹んではいなかった。

カケルと会って、いつもどおりカケルと言葉を交わしたものの、話が展開するにつれ、なぎさは急に困惑しはじめた。それは、「おもしろした」とカケルに言うことが恥ずかしい自分に気づいたからだ。つた。

なぎさは少しドキドキした。カケルをじつと見つめたまま、わざとしばらく沈黙した。カケルの目が、なぎさの身体を気遣いながら、それでいて興味深そうな表情に変わるのが分かった。

「え、まさか・・・漏らし・・・」

と、カケルが質問をするやいなや、なぎさは慌ててそれを遮るよう

「・・・うん、ちゃんとしたの・・・トイレで」

と言った。完全にカケルの質問を聞いたあとでは答えが返せないと思っただった。

なぎさはカケルに初めて嘘をついた。それは結果として、思わせぶりな答え方になってしまった。

なぎさは、カケルが自分の話を全く嫌がっていないことが分かっていた。

なぎさは、カケルにいつもそうして話を聞いてもらうつちに、彼の前では自分があたかも少しだけ弱く、また少しだけ幼い自分でいられることに気づきはじめていた。そのときだけは、まるで陽だまりに包まれるような温かい気持ちを感じるのだった。

そして、漏らしてしまいそうになった自分の体験を彼に話すことで彼の興味をそそることも分かった。そうした「弱い自分」のことを彼に好きになってももらえることに、なぎさは快感に似た気持ちを覚えはじめていた。

今のなぎさは、少しドキドキしながらそういう自分の気持ちの赴くままに行動した。ただその気持ちの本当はどういうものかについては、このときの彼女にはまだよく分からなかった。

夏のいたずら（不思議な予感）

夏が近づくにつれ、鮮やかなキャンパスの燃え立つ緑と、素肌の露出が、おぼろげだったふたりの気持ちをより鮮明にしていた。

「あ、いそがなきゃ、いそがなきゃ・・・」

ある日、練習中に催してしまったなぎさは、観客席に座っていたカケルを見つけると、テニスコートから続くコンクリートの階段を駆け上がって、彼の前で慌てたふりをしてみせた。

「なぎさ、どうしたの？」

カケルが興味深そうに声をかけた。

「トイレ・・・おながが張ったと思ったら、急に下痢？みたいな感じで・・・」

なぎさは、テニスウェアのまま軽く足踏しながら、カケルに答えた。

「はやくしないと、ああ、漏れちゃう」

と言いつつ、なぎさは、無邪気にその場で足踏みするようにはしゃいでみせた。

身体が跳ねるたび、自分のスカートがめくれて白いアンダースコートがチラチラとカケルの目に入っていることも分かっていった。

今にも出てしまいそうな感覚になりながら、そのおしりを包んだ純白のアンダースコートをカケルに見せることで、カケルの気持ちがいっつも以上に高揚するだろうと感じていた。そして、そう思うことで、なぎさ自身も気持ちが高ぶっていった。

「ああ、あのね、なぎさ、話があるんだけど、この間のね・・・」

カケルが珍しくふざけて、なぎさを足止めしようとした。

なぎさは、このままカケルとの悪ふざけに甘えていると、本当にこの場で漏らしてしまいそうな自分に気づき、急に怖くなった。

なぎさは急に真面目顔になると、

「だめ・・・、ごめん、漏れちゃうから、行く・・・」

と言が残して、階段の上にあるトイレへと駆けていった。

トイレを済ませたなぎさが、階段を下りてくると、カケルが声をかけた。

「間にあっただかい？」

なぎさは、いつものように明るく答えた。

「あつ、もう・・・、あぶなかった・・・」

「あぶなかった？」

カケルが笑って訊ねた。

「もう、ね、トイレを目の前にしたら、勝手におしりから出てきそうになったの」

「それじゃトイレが空いてて、よかったね」

「ふさがってたら・・・、完全に漏らしちゃってたかも」

なぎさは、いつもと違い、ちょっと勇気を出しながらカケルと話している自分に気がついた。

「そしたら、どうするの？」

カケルの質問に、なぎさはわざとおどけた素振りで答えた。

「そのままトボトボと歩いて、ここに・・・、”カケルくん・・・、しちゃった”って来たら、どうする？」

カケルが言った。

「そしたら、逃げよっかな・・・」

「えゝ、ひどい！」

「嘘、嘘、大丈夫、なぎさをひとりにしたりしないから・・・」

なぎさは、カケルの言葉にドキツとした。しかし、すぐ気を取り直して、

「ほんと？ 約束だよ」

と無邪気に言った。

しかし、それ以降、カケルはその話題を持ち出すことはなかった。そういうカケルの品の良さが裏目に出て、ふたりがそれ以上の仲に進展することはなかった。

自分の心を占めはじめている何かを、カケルに受けとめてもらいたい、そう感じていたなぎさの気持ちは、いつかじれたい「わだかまり」となり、まるでなぎさのおながが張るように、波を経ながらも次第に蓄積していった。

夏のいたずら（約束のとき）

そんなわだかまりに思いがけなく終止符を打ったのも、やはり夏のいたずらだったとは、そのときまで誰も想像していなかった。

「でも、ああ、どうしよう・・・、さっきのお昼、冷やし中華食べちゃったし・・・」

サークルの皆と一緒に、高原の街の一角にあるショッピングモールに来たとき、牛乳たっぷりのソフトクリームの写真が並んでいるコルトンを見上げながら、なぎさが隣のカケルにつぶやいた。

「食べよっかな・・・、でも今日、ずっとおなか張ってて」

「え？」

「お昼もラーメン系だったでしょ。これ以上脂肪分を摂ると、下痢しちゃうそう」

なぎさはカケルに話した。

「ソフトクリーム食べると、たぶん3時間くらい経ったら、私おなかこわしちゃうと思う」

「そうだね、牛乳をがぶ飲みして、あとで下痢したこと、僕もあるよ」

すると、なぎさはカケルのほうを見て、カケルに判断を求めるように訊いた。

「どうしよう、夕練のときに催したりしたら・・・」

「夕練」というのは、テニスサークルでの合宿中、毎日の日課となっている「夕方の練習」のことだった。その場所は、宿泊先のロッジから森の中を歩いて15分ほどのところにあるテニスコートで、そのテニスコートとそこまでの道沿いに、トイレは無かった。

「今食べればだいじょうぶだよ、催しても夕練の前でしょ？ せっかくだから食べようよ。」

カケルは、せっかくこの高原まで来て、美味しいソフトクリームを食べないのが損だとばかりに、なぎさに言った。

ためらいなくストレートに誘うカケルの言葉に、なぎさはびっくりして、そしてなぜだか急に恥ずかしそうな笑みを浮かべて、カケルに訊いた。

「もし・・・、そのとき出なくて、夕練で我慢できなくなったら？」

「そのときは僕が責任とってあげるから」

「そういえばこの間約束してくれたもんね・・・。ほんと？ 約束だよ」

いつもと違う真面目顔でそう囁くなぎさの姿が、このときのカケルには妙に艶っぽく見えた。その理由はまだカケルには分からなかった。

「うん。じゃあソフトクリーム2つ」

カケルは、なぎさの分もあわせてオーダーした。

夏のいたずら（してほしかったこと・・・？）

「なぎさ、OKなの？」

「・・・うん、まだみたい」

ロッジの廊下でカケルとすれ違いながら、なぎさは微笑み返した。自分のはにかんだ笑顔と裏腹に、カケルの心配そうな表情を感じた。

「なぎさ、行くよ！」

「うん・・・」

親友のあかりがなぎさを誘う大きな声が、廊下に響いた。

なぎさは、カケルに伝えたいことがあった。しかし、どう伝えていいのか分からなかった。言葉をさがしてカケルを見つめるうち、後ろ髪を引かれるように他のメンバーとともにそのまま玄関へと吸い込まれていく自分がいた。

自分のおなかの張りの状態だと、きつともうすぐ激しい下痢になる・

なぎさは、自分の経験からそれが分かっていた。それは夕練が終わってロッジへ帰るまで、間に合わないことを意味していた。

それにもかかわらず、夕練への人の波に流されていく自分がいた。

なぎさは、きっとそのことが分かっているカケルに助けを求めたかった。しかし、言葉が見つからなかった。

《私が練習に行くのを止めてほしい・・・？》

《それとも・・・？》

なぎさは、自分がどうしてほしいのか、分からなかった。

いや、分かっていたのに、それを直視できなかったというほうが正しいかもしれない。

そんななぎさの心を叩くように、刻一刻と、なぎさの腹痛は増していった。

なぎさは、これから起こるうつとしていること、それを選択した自分の気持ちを直視する恐ろしさを感じはじめていた。

《怖い・・・》

テニスのボールを追い、打ち返すたびに、徐々に便意と恐怖心が増す中、なぎさはカケルにすぎるしかなかった。

なぎさのことが気がかりだったカケルは、夕練の終わる頃から、なぎさの動きが明らかにぎこちなく、時折何か苦しそうにしているのを見逃さなかった。

ロッジへの帰り道、なぎさがあかりと並んで話している声が、わざとふたりの脇を追い越すように通りすぎたカケルの耳に入った。

「おなか・・・、いたい」

「なぎさ、だいじょうぶ？　我慢できる？」

「・・・うん、たぶん」

カケルが振り向き、なぎさのほうに目をやると、なぎさはあかりと話しながらも、おなかに手をやりながら、カケルにしきりに助けを求めるような視線を送った。

なぎさの激しい便意のため、なぎさとあかりの歩みはだんだん遅くなり、カケルとの距離はどんどん離れていった。

カケルは動揺した。歩きながら、どうしたらいいのか悩んだ。

カケルの姿が見えなくなったことで、なぎさはますます強い不安と猛烈な便意に襲われはじめた。

《お願い、私をひとりにしないで・・・カケルくん》

なぎさは苦しみ、心のなかで叫んでいた。

カケルも思っていた。

アイスクリームを買ったときの様子から、なぎさはこうなることを分かっていただくと、カケルは悟った。だから、彼女はもう、きつと我慢できないはずだ。

そして、なぎさはずっとありのままの自分を、僕に分かってもらいたかった。なのに、僕がしっかり受け止めてやらなかったために、今日なぎさはこんなに苦しんでいるのだと、カケルは思った。

今、自分にできること・・・それは、なぎさに恥をかかせないで、なぎさの思いを遂げさせること・・・そのためには・・・

カケルは気がついた。

カケルは、ロッジへと帰る集団から抜けだすと、道を少し引き返し、道沿いの大きな木の陰に身を潜めた。ほんのしばらくすると、遅れていたなぎさとあかりの姿が近づいてきた。なぎさは見るからに苦しそうだった。

20メートルほど先の木陰にカケルの姿を発見して、なぎさはうれしくなった。カケルは目で合図を送るように、優しい眼差しで自分を見てくれていた。

なぎさは、嬉しそうに、そして恥ずかしそうに、カケルにうなずいた。

なぎさを襲っていた恐怖心と激しい腹痛が次第に嘘のように引いていき、その代わり、今にもあふれだそうとするような便意が猛烈に高まっていった。

《カケルくん、ごめんね、心配かけて》

《いや、僕が悪いんだ。なぎさの気持ち、しっかり受け止めてあげられなくて》

《私だって、自分の気持ち、分からなかったから・・・》

《ごめん、僕が軽はずみに誘ったばかりに》

《そんなこと言わないで、私が決めたことなんだから》

《そう・・・》

《でも、自分が何をしたかったのか、教えてくれたのは、カケルくん》

《なぎさと話しているとき、ずっと楽しかった》

《私、きつといつかカケルくに、すごく甘えたいんだって、分かったの》

《なんとなく、僕もそれを期待してた》

《いざとなると恥ずかしくて・・・でも、今はこうするしかない》

《大丈夫、今のなぎさ、すごく素敵だよ》

《カケルくん、ほんとに・・・ありがとう・・・あつ、私、もうだめ・・・》

《分かった。あとは、なぎさ、しっかり・・・》

「わっ！！」

木陰から大きな声で飛び出したカケルが、横からなぎさの両肩をたたいた。

「きゃっ！！」

なぎさの身体は、悲鳴とともに少しよろめいた。そして、両脚を少し開いて立ち尽くしたまま、反射的に下腹部を息ませた。

”・・・ビリュリユリユリユ”

言いようなない解放感とともに、デニムのショートパンツに包まれたショーツの中で、たくさんの柔らかいものが、おしりのまわりにあふれ、広がっていくのを、なぎさは感じていた。そのときのくぐもった音が、静まりかえった森に響き渡った。

あかりが、そして周りの誰もが、自分が失禁したことに驚いた。

そして、そうさせたカケルを責める声が聞こえた。

でもカケルはお構いなしに、自分の身体を横から抱きかかえ、Ｔシャツの上からおなかを強くさすってくれた。

「苦しかったでしょ？・・・もうだいじょうぶ」

自分の状況をまだきちんと受け止めきれず、今まで目を伏せていたなぎさは、カケルの優しい語りかけに、はにかんだ笑顔でカケルを見つめた。おなかをさするカケルの手が強くなった。

「うんっ・・・」

なぎさは、姿勢ひとつ変えずに、ただ今までの苦しさをすべてを吐き出すかのように、そして、今までずっと求めていたカケルの優しさに思いっきり甘えるように、息みつづけた。

そしてそのたびに、くぐもった音とともに、パンツの中に柔らかく、そして温かいものがあふれていった。

あかりをはじめ、周りの人間は、カケルとなぎさの間に暖かな雰囲気を感じ、カケルを責めるのをやめた。

夏のいたずら（エピソード〜恋のプロローグ）

「なぎさ、うんちしちゃったの？」

なぎさがあかりといっしょに森の中から出てきたとき、別の女子が声をかけてきた。

その声に促されるようにカケルがなぎさのほうを振り向いた。カケルはなぎさを思いやり、不安そうな顔をしていた。

なぎさは恥ずかしいのに、爽やかな気持ちだった。カケルを安心させようと、ちよつと恥ずかしそうに微笑みながら、グレーのチュニツクTシャツの広がった裾を、ひらりと捲ってみせた。

さつき穿いたばかりの、水色の花柄のビキニショーツに包まれた、自分の丸くて可愛いおしりを、カケルに見せることにもう抵抗はなくなっていた。なぎさは、自分がカケルのことを魅了できていると悟った。

あかりの処理は手際よかった。

なぎさの服を脱がせやすいよう、まずサンダルを脱がせて素足でな

ぎさを地面に立たせると、あかりはなぎさのうしろにしゃがみ、最初になぎさのショートパンツのホックとファスナーを外し、ストンと落とすようにしてくるぶしまで脱がせた。

そして、チュニックTシャツの裾を捲りあげ、それをなぎさの両手に持たせたあと、あふれそうになっているたくさんの汚物を、なるべく彼女の太腿などにこぼさないように、ゆっくりとショーツを下げていった。

ショーツをくるぶしまで下げると、あかりはなぎさのおしりをタオルで押さえながら、いったんなぎさを片脚ずつ後ろに歩かせるようにしてショーツとショートパンツから両脚を抜かせ、ふたたびなぎさを立たせたままタオルを2、3枚使って、なぎさの汚れたところを綺麗に拭き取った。

木立の間からそのシルエットが見える時間は、カケルにとって長い時間だった。

もう大人の身体なのに、自分のせいで、結局なぎさは人前で失禁してしまった。

ほんとうに、自分のとった行動は正しかったのだろうか？

その結果、なぎさはいまこうして、子供のように立たされたまま為

す術も無く、あかりに世話されている。

これはほんとうになぎさが望んだことだったのだろうか？

もう少し、彼女の気持ちに早く気づいてあげていれば、もう少し、彼女の気持ちを受け止めてあげていれば、彼女がこれほど恥ずかしい思いをしてまで、思いを遂げることはなかっただろうに・・・

カケルは、なぎさが戻ってくるまでの間、不安に苛まれていた。

「なぎさ、僕・・・、ごめん・・・」

カケルは森から出てきたなぎさに駆け寄ったが、どう言葉をかけていいか分からず、涙を浮かべながら、なぎさに謝った。

でも、その涙のわけは、なぎさが、こんな恥ずかしい思いをしてまで、カケルに自分の気持ちを伝えてくれたことが、うれしかったからだった。

「ううん、私こそ、カケルくんを苦しめちゃって、ごめんね」

「そんな、苦しんだのは、なぎさじゃない？　僕があんなこと言っただけに・・・」

なぎさは言った。

「ソフトクリーム食べたとき、こうなるって分かってたの。でも、おなかが痛くなって、ほんとに不安だった。だから、カケルくんが待っていてくれて、うれしかった。漏らしちゃって恥ずかしかったけど・・・それで長い間、つかえていたものがやっと取れた気がする・・・」

カケルは涙がこぼれた。そして笑ってなぎさを見つめ、言った。

「今のなぎさも、すごく・・・素敵だよ」

「パンツしか穿いてないから、ちょっと落ち着かない、けどね」

なぎさは、カケルに甘えるように少し両脚を揺さぶってみせた。

「寒くない・・・？」

「少しだけ・・・おなかに手を当ててくれる？ カケルくんの手、すごく温かったから」

なぎさのＴシャツの裾から伸びる、いつもよりずっと長い両脚が、穏やかな夕日に映えて、カケルの目にも、なぎさの目にも、とても眩しかった。

（「夏のいたずら」終わり）

性的な思い（Neoスプラッシュへ）

恥ずかしいと分かっている、あえてそれをするのが、恋のわだかまりを打ち破り、ふたりの関係を一気に進展させることができるとしたら・・・

彼を振り向かせたり、自分の気持ちを受け止めてもらうために、こんな恥ずかしい思いをしてまで・・・という、いじらしく健気な気持ちに彼に伝わるとしたら・・・

本作「夏のいたずら」ではそこまではつきり意識したわけじゃなく、自分でもどうしたいのか分からないのに、自分の中のわだかまりの結果として、彼の前で恥ずかしい失敗をしてもいいという「未必の故意」に変わっていく様子を描いてみたつもりです。

これまでの「スプラッシュ」シリーズでは、そうやって恥ずかしいと分かっているながら恋のわだかまりを解決させたり、不安や淋しさを受け止めてもらいたかったり、甘えたりしておもらしする、そういう女の子（男の子）を描いてきました。

でも、冒頭の「スプラッシュについて」でも書いたとおり、おもしろいには性的に「ドキッとする」、「エッチな気がする」感覚があります。それは見る立場だけでなく、する立場でも感じるものだと思います。今までの「スプラッシュ」でも背景としてその要素は織り込まれているつもりですが、その「性的な感覚」にもう一歩踏み込んだ小説を書いてみたいと思いました。それはもしかしたらR15の域を超えてしまうかもしれないので、R18の新たな「Neoスプラッシュ」シリーズとしました。

こちらはムーンライトノベルズにて連載中の「Neoスプラッシュ ユー失禁(おもらし)」が織り成す恋愛小説」をお読みいただくと幸いです。

こちらの「スプラッシュ」シリーズのほうも、いずれ続編を書きたいと思っていますので、ともにどうかよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8890t/>

スプラッシュ ～失禁（おもらし）からはじまる恋愛小説～

2011年11月17日18時47分発行